

デジタル化の誘引¹⁾

滋賀大学経済経営研究所と小樽商科大学百年史編纂室を事例として

阿部安成（滋賀大学経済学部調査資料室主任）

平井孝典（小樽商科大学百年史編纂室研究員）

このワーキングペーパーは、2009年11月13日におこなわれた滋賀大学経済学部ワークショップ「Asian Studies Workshop ワークショップ」¹⁾と、2010年3月5日・6日に京都の国際日本文化研究センターで開催された国際シンポジウム「近代東アジア歴史研究の現状と既存史料の有効利用/The State of Historical Research in East Asian History and the Effective Use of Extant Sources」²⁾（国際日本文化研究センター、旧植民地関係資料に関する研究グループ、共催）の第セッション「東アジア関連研究資料のデジタル化について」における報告に加筆修正した内容となる。



報告の前者は、小樽商科大学百年史編纂室研究員の平井孝典による「小樽商科大学百年史編纂室の活動と『資料集』」であり、後者の第セッションは、平井孝典「小樽商科大学の事例 - 収集資料

¹⁾本稿は、2009年度水学術後援学術調査・研究助成による研究課題「20世紀前期日本の高等商業学校における生徒の調査と分析の技能」、2009年度滋賀大学教育研究プロジェクトセンターによる研究課題「20世紀前期日本の高等商業学校スタディーズ・プロジェクト」による成果の1つであり、2009年度「サーブス・イノベーション人材育成」の「アーカイブ形成の現場プロジェクト」による活動の一端である。

を活用するための動的『資料集』の紹介」、本学部阿部と江竜美子「滋賀大学経済経営研究所の事例 - 彦根高等商業学校収集資料の画像公開」、アジア経済研究所の泉沢久美子「アジア経済研究所デジタル・アーカイブ『近現代アジアのなかの日本』」、アジア歴史資料センターの田村憲一と大沢武彦「アジア歴史資料センターの現状と今後の次期システムについて」で構成された（司会は井村哲郎、コメンテーターは東京大学情報学環社会情報研究資料センターの研谷紀夫）

本稿には、まず後者の阿部による議論を収め（報告用に作成した原稿に手をくわえた）つぎに前者と後者の双方にかかわる平井の報告を載せた（ワークショップの録音を文字におこし、それに平井が手をくわえた）

（阿部）

滋賀大学経済経営研究所調査資料室の阿部安成ともうします。きょうは、研究所の助手江竜美子といっしょに、研究所が所蔵する史料のデジタル公開をご紹介します。研究所調査資料室といましても、きのう見学した京都大学経済学部の調査資料室とくらべると、調査資料棚か調査資料箱といわなくてはならないほどに小規模の機関です。専任のスタッフは事務の助手1名と非常勤職員1名がいるだけで、所長、評議員、調査資料室主任、調査資料室員はいずれも経済学部教員の兼任です。この第セッションのもともとの発想の1つは、わたしたちのような小規模の機関における所蔵史料の保存と公開の現状を共有し、デジタル化という技術を活用して所蔵史料の保存と公開をすすめる知恵を模索するところがありました。これから、わたしたちの研究所での所蔵史料の保存と公開をめぐる史料のデジタル化についてご紹介いたします。

お手元にある「滋賀大学経済経営研究所」と上部に記されたペーパーをご覧ください。研究所のウェブサイトのトップページ（<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>）をコピーしました。報告での事例紹介は、このウェブサイトのコンテンツに沿ってお話いたします。

はじめに研究所の歴史をおおまかに述べます。滋賀大学は、経済学部と教育学部の2学部からなる国立大学法人で、その規模においてもこぢんまりとした大学です。経済学部の母体は、1923年創立の彦根高等商業学校という実学教育を担う教育機関です。この彦根高等商業学校には開学の年に、

調査課という施設が設けられました。ここがわたしたちの研究所の始まりとなります。彦根、山口、小樽、大分、長崎などの高等商業学校が、それらの学校が活動していた時代の「外地」の文献を収集していたことは、その同時代においてはもちろんのことよく知られていました。それぞれの高等商業学校で、月報や彙報などを刊行し、それらを相互に交換して、それぞれの活動のようすを共有していました。そして、第二次世界大戦後には、高等商業学校が同時代の調査資料として収集した文献が、アジア史研究の史料として活用されるようになりました。1980年代から1990年代にかけて、多くの旧制高等商業学校を母体とする国立大学の経済学系学部の史料所蔵機関において、かつて高等商業学校が収集した文献のなかから、「旧植民地関係資料」と呼ぶにふさわし、また、その名にみあった歴史資料を抜き出して、その目録を刊行しました。わたしたちの研究所でも、地域別に、「満蒙」「支那」「朝鮮」「台湾・南洋・樺太」「補遺」の順で、5冊の「旧植民地関係資料」の目録をつくりました。

20世紀前期に設立された旧制高等商業学校の多くは、山口高等商業学校や長崎高等商業学校に顕著にあらわれているとおり、朝鮮半島、台湾、中国大陸において実業を担う人材の育成をその1つの重要な目的としていました。こうした旧制高等商業学校の特質と、第二次世界大戦後のアジア史研究の新たな進展とが、旧制高等商業学校を母体とする国立大学経済学系学部の所蔵史料のなかから、「旧植民地関係資料」を特に押し出したといつてよいでしょう。

「旧植民地関係資料」の目録が編纂されたのちには、それらの史料をどのように保存するかがつぎの課題となりました。それというのも、酸性紙でできた図書は、温度と湿度の管理が適切におこなえない保管場所に長く置かれていたため、はなはだしく劣化しつつあったからです。そこで2000年代には、「旧植民地関係資料」のマイクロフィルムによる撮影を始めました。おそらく当時もまたいまも、原本にかわる保存の媒体としては、マイクロフィルムがもっとも長く将来にむけて残るのではないのでしょうか。「旧植民地関係資料」のマイクロフィルム撮影をおこない、史料目録のウェブサイトにおけるデータベース化への転換をすすめてゆくと、所蔵史料の検索は簡便になり、史料の複写も容易になり、そして史料自体を傷めることなく、その代替保存の手立ても整っていきました。しかしこれでは、史料の公開をめぐるっては、利用者にとって便利かどうかは十分に改善されたとはいえません。いまでこそ、おもに大学間でおこなわれている文献複写依頼が機能しています

が、それでも、すべての「旧植民地関係資料」がマイクロフィルムで撮影されていなければ、あるいは文献複写依頼の制度を使えない利用者は、やはり所蔵機関にいてそこで史料をみななければならないからです。

たんに保存するだけでなく、所蔵史料の公開を促進するための課題が、史料のデジタル化になりました。このデジタル化とは、広く、職場にも家庭にも浸透して(あるいは忍び込んで)仕事と生活の場のすみずみに隈なくおよんでいます。しかしその一方で、いまだにわたしたちにとっては、わかりにくさがつきまとっている技術となっています。この「わかりにくさ」が、わたしたちが提示する論点の1つとなります。それはまたあとで述べることとして、研究所のホームページからデジタルアーカイブをみてゆきましょう。

研究所のデジタルアーカイブでは、彦根高等商業学校が収集したり刊行したりした文献を画像で公開しています。彦根高等商業学校はさきほど述べましたとおり1923年の創立ですから、ここではおよそ1920年代から1940年代につくられた史料を公開しています。もちろんこれは、著作権を考慮してのことでもあります。

まず「旧植民地関係資料」をみましょう。これは史料のデジタル化よりもまえに作成した、史料の書誌情報を検索できるデータベース(ホームページでは、「所蔵資料」の「蔵書検索」のところ)と連動していて、史料をキーワードで検索して、ヒットした史料の書誌情報のところにサムネイルが表示されれば、その史料はデジタル化済みで、ウェブ上で史料がみられます。たとえばここでは、『満蒙印画輯』をみましょう。なお、研究所のデータベースであれデジタルアーカイブであれ、キーワードを入力せずにその欄を空白したままで検索を始めると、それぞれのデータベースの全件が表示されるようになっています。

この「旧植民地関係資料」のデジタルアーカイブは、カラー画像で史料を公開しています(JPEG。保存用はTIFF)。この撮影を始めたころは、デジタル化の費用がいまよりも1桁ちがう単価となっていて、乏しい資金ではあまり多くのデジタル撮影がおこなえず、できるだけヴィジュアルな史料を公開する、また、史料のテーマを「観光」や「旅行」とする、という作業方針を立てました²⁾。

²⁾これらの史料を活用して、阿部安成「植民地観光のなかのナショナリティ - 20世紀初頭の朝鮮というフィールド」(『東アジアにおける民衆の世界観(3)』アジア民衆史研究第9集、アジア民衆史

つぎは、「彦根高商卒業アルバム」です。これは原本がモノクロですので、カラーでの撮影はしませんでした（公開 JPEG、保存 TIFF）。旧制高等商業学校ではどこの学校でも、いわゆる卒業アルバムを作成していました。彦根高等商業学校のそれは、SOUVENIR、MEMORIA などと題されていました。ここには、教官と生徒の肖像写真はもちろん、校長室や教室や図書館などの学内のようす、ゼミナールやクラブの活動、朝鮮半島や「満洲」への修学旅行の記録、また、学校のあった町の風景が収められています。

「彦根高商刊行物」は、さきの2つとちがって文字史料ばかりですので、PDF としました。書誌情報とともに、サムネイルにあたる「全体プレビュー」が左に、「ダウンロード」が右に表示されません。閲覧だけでなく印刷もできます。

そして、「石田記念文庫」。これは正確には、彦根高等商業学校の収集図書でも刊行物でもありません。石田とは、旧制彦根高等商業学校から新制滋賀大学経済学部にかけて在職した石田興平教授のことで、彼の蔵書などをまとめたコレクションがこれになります。石田記念文庫には文字ばかりの図書と写真帖などのヴィジュアル図画が混在しているので、JPEG と PDF の双方があります。石田興平には『満洲における植民地経済の史的展開』（ミネルヴァ書房、1964年）の著作があり、彼はかつて建国大学に在職していたこともありました。建国大学でのガリ版刷りのテキストである『満洲計画経済概論』を、一例としてみましょ。

研究所のデジタルアーカイブでは、デジタル化した史料の公開だけでなく、それらを用いた企画展も WEB 上で開きました。このインターネット企画展は、2004年に始めて2008年までに4回おこない、期間限定だったこれらを2010年3月1日にあらためてこのアーカイブにまとめました。展示スペースを持たないわたしたちの研究所にとって、このデジタル技術はとても大きな力になっています。

第1回の「三中井を歴史にさかのぼる」（2004年）では、わたしたちのキャンパスのある彦根でいまお店を開いている洋菓子三中井（創業1954年）がお持ちの写真を用いた展示をおこないました。この三中井は、1945年以前の朝鮮半島から中国大陆にかけて、いくつもの本支店をおいていた

研究会、2004年）同「大陸に興奮する修学旅行 - 山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」」（『中国21』第29号、愛知大学現代中国学会、2008年）の成果を発信した。

百貨店の後裔になります。三中井を宣伝する吉田初三郎の鳥瞰図、店内のようす、また毎年元日に本支店で撮っていた店員の集合写真などを展示しました。第2回の「旧制彦根高商の海外修学旅行 - 戦前のアジアへ」(2005年)では、彦根高等商業学校の修学旅行の旅程を表示し、それぞれの場所の当時の風景を、彦根高等商業学校収集資料(「旧植民地関係資料」)に収載された写真を用いてみせる展示としました。

デジタルアーカイブに収録した、「旧植民地関係資料」「石田記念文庫」「学校一覧」「彦根高商刊行物」「彦根高商卒業アルバム」のいずれも、冊子体の目録とデータベースの両方があります。さきにふれましたとおり、わたしたちのデジタルアーカイブは蔵書検索のできるデータベースと連動しています。史料目録をつくる デジタル化をおこなう、この手順で作業をすすめてきました。ただ、じつはわたしたちは、目録をつくることには慣れていても、専門業者によっておこなわれたデジタル化した史料画像をアーカイブとしてウェブにおくことには、ほとんど知識も技術もありませんでした。こうしたとき、滋賀大学経済学部がいくらか総合学部の体をなしていることが生きてきました。本学部は6つの学科で構成され、そのうちの1つに情報管理学科があります。そのゼミナールの協力を得て、デジタルアーカイブの構築が可能となりました。

しかしデジタル化した史料が増えるにつれ、また、JPEG や TIFF の形式にもう1つPDF がくわわったため、情報管理学科のゼミナールによるいわば手作りのデジタルアーカイブから、より自身の整ったそれへの転換が必要となり、これもまた専門業者に発注せざるを得なくなりました。しかも研究所の事務スタッフのだけれど、それこそ Word や Excel を使うのと同じくらいかんたんにデジタルデータをアーカイブに収載できる仕組みにする必要がありました。PDF と、JPEG や TIFF とではデータをアップする速さや簡便さが異なるといった難点があるものの、アップしやすいアーカイブになっていると感じています。

ここでさきにふれた「わかりにくさ」について述べると、いったいどのようなデジタル化が最良であり最適なのかがよくわからないという鬱屈をわたしたちはつねに抱えています。たとえば、国立国会図書館の近代デジタルライブラリも PDF の形式を採用しています。では、これはいったいいつまで使えるのか。アーカイブにブラウザやビューアーを組み込むことの可否は？画像1コマあたりの容量はどのくらいにするか？……などの初歩の疑問をくりかえし自問することとなります。

しかも、こういった疑問をきちんと解決できないままでは、学部の企画係や大学本部の財務課に対して起案もできなかつたり、あるいは財務課が本省に対して説明もできなかつたりしてしまうことにもなります。

デジタル化が時代の趨勢であり、事業としてマイクロフィルム撮影よりもデジタル化のほうがなんとなく了解されやすい一面がありはするものの、他方で、デジタル化のいわば餌いならし方や耐久性については、まだまだ十分に理解されていないのではないのでしょうか。さらには、史料が所蔵されているその場にゆかなくても閲覧ができるという、利用者にとってはこのうえない便利さを最良とする公開の仕方がもとめられ、それが是として固定されてしまうと、わたしが旧制高等商業学校の史料にかかわるようになって感じ出した、史料を、それを収集し保管してきた機関とその歴史から切り離して活用する、いわば史料の非歴史化をますます加速させることにつながるのではないかと危惧します。

かつて、旧制高等商業学校を母体とする国立大学経済学系学部が所蔵する「旧植民地関係資料」は、どれも金太郎飴のようにほとんど同じではないか、といわれたことがありました。旧制高等商業学校にかぎらず、昨日みた京都大学経済学部調査資料室においても、(100頁以下のパンフレット類などが無いという違いはあれ)³⁾、その蔵書が似通っている面があると感じます。違いは、総量(総冊数)の多寡と蔵書の刊行時期の幅や古さにあるのでしょうか。もちろんこれは、旧制高等商業学校が収集した「旧植民地関係資料」には当てはまるかもしれませんが、学校それ自体の性格や活動までもが金太郎飴であるのかどうかは、まだきちんと実証されてはいないでしょう。どのような教育がだれにむけておこなわれていたのか、生徒たちはなにを学び、どのようなものになっていたのか、といったそれぞれの高等商業学校での様態をつかむことをとおして、旧制高等商業学校の個別性と全体性が明らかとなるのではないかと展望しています。

さきほどわたしたちの研究所はその規模が小さいといいましたが、利用できるスペースが小さいというだけでなく、与えられる予算においてもそれが小さいという難儀があります。学部の1部署としての研究所に配分される予算は、そのほとんどが研究紀要である『彦根論叢』という逐次刊行

³⁾ 国際シンポジウム「近代東アジア歴史研究の現状と既存史料の有効利用」の第セッション「国内各機関の史料所蔵状況とその利用」での京都大学経済学研究科教授堀和生の報告「京都大学経済学部・人文科学研究所のアジア関係図書について」による。

物の発行に宛てることとなっていて、所蔵史料の保存や公開に使える予算はまったくありません。これまで紹介してきた仕事はいずれも、学長裁量経費、科学研究費研究成果公開促進費データベース、概算要求によって得られた資金で可能となったものばかりです。概算要求による特別教育研究経費を用いた所蔵史料の保存と公開事業の進展は、経済学部のみならず滋賀大学にとっても快挙といつてよい出来事でした。2007年度から2009年度にかけては、かつての旧制高等商業学校にかかわる史料についての概算要求は、滋賀大学だけでなく、小樽商科大学（小樽高等商業学校）でも一橋大学（東京高等商業学校）でもおりました。機敏な事務方であれば、文部科学省の動向を迅速に適確に察知し、それをふまえた概算要求の仕方をおこなうでしょうが、本学のばあいは、どうもうまく事務が機能せず、その後は概算要求の申請をおこなっていません。

デジタル化は、大学がその所蔵する史料をもとにして資金を得ようとするときの、1つの重要な事業であるのかもしれませんが。さきにあげた、高等商業学校という学知を研究してゆくときの課題を解いてゆくためにも、デジタル化は欠くことのできない技術であり、資金調達の材料であるともいえます。ただし、所蔵史料の保存や公開について学内の事務方と協議するときにはいつも、それでどうするの？と問われてしまいます。貴重な史料かもしれないが、それを保存し、公開して、いったいどういう社会貢献が果せるのか、それがどのような大学の意義として発信できるのか、という問いです。（多くのばあいこれにもう1つ、所蔵史料のすべてを未来永劫にむけて保存しようとするの？という質問がかわります。わたしは、すべてを、ずっと、と主張したことはないのですが）、保存し、公開し、そしてそれらをどのように活用しうるのかの見通しも述べないと、所蔵史料を適切に保持し、できるだけ広く提供するという地味な事業の理解は得られにくいのです。

高等商業学校研究の課題は、そこで学んだ生徒たちの動向を明らかにすることにあると考えています。生徒が執筆した文章や論文はそう多く残っていない、またそれらがあったとしても閲覧できるようにはなっていないという現状があります。目録の公開は、小樽商科大学と一橋大学くらいではないでしょうか⁴⁾。ほかにも、山口高等商業学校と長崎高等商業学校の生徒が執筆した論文が、

4) 平井孝典「1932年から1963年に提出された生徒学生提出論文」(『小樽商科大学史紀要』第1号、2007年)、「「修学旅行」報告書」(本学学生調査報告)蔵書リスト(一橋大学附属図書館ホームページ<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/bunko/houkoku.htm>)、一橋大学附属図書館では貴重資料として閲覧可、またデジタル化のうえウェブ上での公開も予定しているという。彦根高等商業学校

それぞれ、山口大学経済学部、長崎大学経済学部にあります。どちらも開学当初からの論文が保管されているようで、その量は膨大になります。前者についてはその目録づくりを2009年2月に試みたところ、1日に2箱くらいの作業がやっとで、165点の整理をしたところで中断し、いまはどちらもほぼ密封されています。

生徒が執筆した、しかも公開を前提としていない著作物については、著作権や個人情報保護の観点からさまざまな制約があることは想定できます。一方でそれらが歴史資料として、あるいは貴重資料として公開されている事例があるとき、いま各大学がすすめている学術情報リポジトリのコンテンツを充実させるという誘惑を手管として、所蔵史料の公開を実現できるとよいと望んでいます。ただし、そうしたときに、デジタル化という技法が現在のわたしたちの社会において、どのように機能しているのか、なにを可能とし、同時に、なにをわからなくさせているのかをできるだけうまく掴んでおかないと、史料を活かせなくなるのではないかという思いも一方にあります。

そのときの検証項目が、史料の歴史化となります。アーカイブとは、なにもただ文書や記録が蓄積されていればそう呼ばれるにみあう組織や機関となるのではなく、自分たちが持っている、ときの経過とともに歴史の記録となる史料をめぐってどのような業務をおこなってきたのかも、あわせて記録し蓄積して初めて、アーカイブにふさわしい仕事をしているといえるとおもっています。史料から、それ自体をめぐる歴史を読みとり、これから増えてゆく記録にきちんと歴史を付加してゆく。これが史料の歴史化です。この作業はなにも歴史研究者の専売でもなければ独擅場でもありません。この作業にデジタル化は、一見、簡単便利という誘いをかけ、一方で、しかしわたしたちの社会における技術としてのわかりにくさをもたえて、浸潤してきています。わたしたちは史料をどのように活用しようとしているのか、その自覚を曖昧におざなりにしたままでデジタル化をすすめてしまうと、それは史料の非歴史化に陥り、記録がほんとうにただの断片となって千切れてしまうとおもいます。

(阿部)

盲導犬は彦根が発祥の地ですね。子供のとき読んだ本の記憶です。昭和30年代のはず。まだ日本に1頭も盲導犬がない時代に、塩屋賢一という人が、彦根のまちで1匹のシェパードを、訓練して、その後、日本に盲導犬を普及するきっかけをつくりました。塩屋さんは海外で盲導犬の訓練を学んだわけではないので、おそらく海外の文献を見てイメージして、どんなふうにするのかなあ、こんなふうにするのかなあという感じで訓練したようです。彼が取った手法というのが、自分も目隠しをして犬に引かせる。ダンプにひかれそうになるは、まわりからいろんなことをいわれるので、たいへんだったという話が残っています。その苦労があって1匹の盲導犬が誕生します。

【会場】いつの30年代ですか。

【平井】昭和30年代です。

【会場】昭和30年代。それまでなかったんですか。盲導犬って。

【平井】ええ。そうですね。一部、海外から持ってきた例があるかもしれないですけども、私は知らないですから。おそらく、ここが最初ということで。彦根のたぶん、まちおこしの話が何かに使われているかもしれません。

【会場】使われてないですね。

【阿部】盲学校がかなり古くからあったんですね。

【平井】そうですね。彦根はそういうところですから。盲学校の先生が塩屋さんに、盲導犬をつくってほしいと依頼があったのでしょう。彦根のすごく感動的なドラマです。

その話をなぜ最初に申しあげたかということ、私のやっているこのアーカイブズという仕事は、全国でいろんな方がいろんな立場でやっていらっしゃるんですが、まさに、最初に彦根で盲導犬を育てているような偏見や誤解やいろんな嫌がらせも含めて、苦労されたということと重なっているわけですね。そこからスタートして、いまは誰も盲導犬について疑問に思う人はいませんし、聴導犬というのが新しく出てきても、すんなりと受け入れます。そういった時代に、ようやく40年たって、なっちはいる。まさに2001年以来、私が紆余曲折やってきたアーカイブズの仕事というのが盲導犬の感動のイメージと重なるということで、少しよい話をさせていただきました。

ただ、ちょっと1つお断りしなければならないのは、アーカイブズといったときに、2つ問題が

ありまして、1つは、百年史編纂というのが私の本来の仕事です。何でアーカイブズなんだということ、今日に至るまで言われ続けています。百年史編纂だけをやっていればいいというような言い方をされ続けてはいるんですが、もう阿部先生も江竜さんも、菊地先生もご存じのように、資料を整理しないことには、使えないというあたりまえのことが、いままで十分に認識されていません。

2001年の時点で、小樽商科大学の日本史の教員と、どうやって資料整理をするかという協議をしたときに、「直感でいい」といわれて、私は愕然としました。「資料の山を置いておいて、たまたま手に触れたものを引っ張り出してきて、そこにあつた資料だけを見て、百年史編纂を書けばいい。ほかの大学もそうやって、やっているんだからいいんだ」という話をされて、これは何もいいようがなかったというか。それではちょっとだめだろうと思ったということです。

あともう1つは、私のようなこういう百年史編纂の関係の報告というと、出席される先生方はやはり、どんな資料があるのかなとか、資料がどういうふうに使えるのかとか、そういうような話を期待される方が多いんです。やはり私としましては、アーカイブズ資料整理そのもののお話が多くなります。やはり、アーカイブズの仕事、資料整理がきちんとおこなわれて、初めて資料の利用ですとか公開とかになります。

今日のアウトラインをご説明する前に、略歴を述べます。法学部の人間が資料整理に向いているとはいいませんけれども、歴史学の人間ではなくてもいいんだということ、ただ認識していただければという意味で、レジюмеに略歴を付けました。私は、「どこで日本史をやったんですか」と聞かれることが何回もあります。歴史学の素養はまったくありませんと、そのつど答えて、だんだん答えているうちにストレスになってきます。むしろ法人文書を扱うには、行政法、行政学をやったほうがいい。あと法学部というのは、法律だけを勉強しているのではなくて、経済や経営学も全部やりますので、小樽商科大学のようなところで資料を扱おうとしたときには、むしろ日本史の近世史をやっていた人とか、そういうような人に比べれば、はるかに資料の扱いやすさというのは感じるのではないかなと思います。

ちなみに大きな研修に2ついています。2003年に(ここの江竜さんも行かれた)国文学研究資料館の「アーカイブズ・カレッジ 史料管理学研修会」、私のほうは長期ですけれどももっています。これに行ったきっかけは、まったくの偶然といえますか、全然アイデアがなかったんです。小

樽商科大学に一人だけ学芸員の資格を持っている教員がおります。この人の強いすすめです。私は百年史編纂の資料整理と国文学研究資料館でやっていることが、実は結びついていませんでした。すすめてくれた教員、彼女が学芸員の資格を取るときに、京都府立総合資料館で研修を受けています。京都府立総合資料館もご存じのようにアーカイブズです。あそこは博物館でもない、図書館でもないという、変な施設なんです。実質的には一応アーカイブズと言えるところでして、そこでたまたま勉強した人が、「ぜひ」「絶対に」といっていました。

また、2008年の公文書館専門職員養成課程のほうは、これも私は全然思い付かなかったんです。当時の総務課の課長が、自分のことを人事が専門だといつもいっていた方ですが、ぜひいけということをお願いしました。そして副学長にもいいといわれて、いくことができました。

あと、何か自分の宣伝みたいになってしまいますが、科研費は3年間1回だけ取れまして、レジュメに記したようなテーマでやっています。最近、北海道と天気の共通性があるものですから、北欧のアーカイブズを見て回っています。なぜフィンランドだ、アイスランド、デンマークだといわれるんですが、今日のお話のメインではないので、ここではお話しはしませんが、あとで食事を取りながら、そういうお話でもできれば面白いかなと思います。参考までに言っておきますと、北欧5か国といっても、スウェーデン、フィンランドとほかの3か国とでは、制度がまったく違うようです。日本のようにアーカイブズが成熟していないところだと、その制度の違いを考える段階にありませんが。

簡単に言いますと、デンマークは、一元的なアーカイブズを目指しているところです。つまり各組織に自立的にアーカイブズをつくらせないという制度を取っています。デンマークはビジネス・アーカイブズも国立です。近江商人の史料館といったようなものをつくるのではなくて、すべて国に移管して一元的に整理します。例外は少しあるようですが、基本はすべてコペンハーゲンのナショナル・ビジネス・アーカイブズに集める。あとコペンハーゲン大学などの各国立大学にアーカイブズをつくることは認めずに、すべて国立公文書館に移管するというスタイルを取っているのが、デンマーク、アイスランド等になります。

反対にフィンランドやスウェーデンというのは多元的なアーカイブズを目指して、組織ごとに無数のようにアーカイブズをつくっています。ノキアはノキアでアーカイブズがあるし、へ

ヘルシンキ大学はヘルシンキ大学でアーカイブズを持っているし、新しい大学ができれば、アーカイブズをつくらないと予算はやらないという話になって、アーカイブズを持つのは当然で、一元的なかたちではないのです。ただ、どこにも資料の行き先がないようなものに関しては、国立公文書館の私文書部門が全部引き取る。破綻した共産党の資料といったようなものについては、いずれ国立公文書館に移管されるというようなことになっています。

今日お話をさせていただくのは、百年史編纂室および関係組織の体制についてということを経験に押しこめて、次に百年史編纂室の現在の業務、それから資料の収集ということを経験を、いままでいそろんなところで書いたりとか、報告もさせていただいたりしているんですけども、今回まとめさせていただきます。

阿部先生をはじめ滋賀大学にほんとうにお世話になったのですが、文部科学省に提出する概算要求の特別教育研究経費のお話をし、あとは小樽商科大学の、これがほんとうは今日一番話したいことなんです、「資料集」とは、というご説明をします。検索システムのお話ですとか、関係する法人文書の収集範囲ですとか、そういったようなお話をしていきます。

百年史編纂室および関係組織の体制について。百年史編纂室は2001年、2002年から私が実質的に整理というのを始めたんですけども、体制としてできあがったのは、まだ2年ほど前でして、最初の規程ができたのは、3年前の2006年です。一応いろいろと変遷がありまして、いまはレジюмеに記したような体制になっております。

創立百周年記念事業委員会という、編纂室よりもあとにできた、親組織があります。創立百周年記念事業推進室が今年できて、ここに専任の職員一人が専任で、一人が再雇用職員で就職課の課長をやっていた人がなっていますけれども、事務組織としてあります。実は、いま百年史編纂室は総務課ではなくて、推進室が事務担当になっていますが、推進室のほかの2名の職員が総務課と兼ねているものですから、そのへんの線引きというものがあいまいになっていまして、以前と同じようなスタイルになっています。ただ、いま現在は、創立百周年記念事業推進室が関係組織の事務を全部やることにはなっています。

創立百周年記念事業委員会はいわば全体を統括する委員会です。その下に小委員会というのがいくつか設けられています。これは規定に定められていますが、そのうちの1つが百年史編纂小委

員会です。あとは例えば、どんな委員会があるかといいますと、緑化委員会ですとか、いろんな百周年記念事業関係の委員会がいくつか並んでいるということになります。

百年史編纂小委員会に関しては、委員長が副学長でして、あと委員が学科の代表と編纂室長ということになっております。事務はこれまた先ほど申しあげましたように、創立百周年記念事業推進室ということになります。私はここのメンバーにはなってはいません。ただ実質的には出席しております。実際の業務の状況ですとか、そういうことをご説明する機会は何回かあります。ただ委員会自体は、まだ2回目だとか3回目だとかという感じで、ほとんど開かれていないのが実情ではあります。

一応、百年史編纂小委員会の監督を受ける組織として、百年史編纂室、図書資料展示ワーキンググループというのがあります。図書資料展示ワーキンググループは事務組織がここだけ違って、附属図書館ということになっています。なぜかといいますと、図書館の貴重図書などを含めて、記念の展示をやるという趣旨なものですから、2001年の90周年展のときは、図書館の貴重図書の展示と私が担当した展示との2つに分かれていました。今回は統合してやるということで、こういうワーキンググループができています。

百年史編纂室の委員長が荻野富士夫先生、委員は、今西一先生と、ポーランドの経済史の松家仁さんという方がいます。あともう一人メンバー、会計史の渡辺和夫先生がなっぺいらっしゃいます。それと私も委員として名前を連ねています。事務補助員が欠員となっています。この表をつくったときが欠員だったんですが、いまは9月に公募して二人採用されております。前にIT関係の会社に勤めていた人と、もう一人は、札幌市の図書館に勤めていた人が採用されて、いまこの時間にも仕事をしてくれていると思います。

【会場】百周年は何年でしたっけ。

【平井】2つの意味で問題になるんですね。1つはいつも阿部先生がいわれているように連続性の問題があります。一応、小樽高商が設置されたのが1910年ですが、実際に開校し動き出したのが1911年ですので、そこから数えて2011年にしています。小樽商科大学の設置申請書は経専が作成しています。

2つめに、変なことがあります。先ほどいいました阿部先生の連続性の問題と関係があるんですけども、実は小樽高商が動きだしたのは5月5日なんですね。入学試験とかを除いて、実際に授業など

を始めた日が5月5日。本来、1949年までは記念日は5月5日でずっとやっていたんです。新制大学になってからは、最初に記念式典をやったのが7月7日です。それからなぜか、起点は1910年ないし1911年であるにもかかわらず、そこからは記念日が7月7日になっています。2011年の記念式典がおこなわれる日は7月7日になります。ですから、百年史の関係の出版のほうも7月7日の日付にして出版されることになっています。

だいたい5月ごろに何かものを出そうとしたときは、5月5日に日付を合わせるようにしたり、7月のときは7月7日にしたりですとか、2月ですと小林多喜二の命日の2月20日に無理やりしたりですとか、よくそういうことをしています。ちょっとそのへんが百年といったときに、あまりシビアには考えられていないという問題がずっとありまして、いまだにそういった議論は結論を出されないまま百周年を迎えるのかなという感じです。たしかに広島大学や神戸大学は、かなりシビアな議論を学内でやっていたようですけれども、小樽に関しては何となく2011年が百年ということになって、7月7日にやることに誰も疑問に思わないまま、おこなわれるというところなんです。

組織はだいたいこんな感じになっています。小さい大学でありながら、やたら頭でっかちな、一応立派な組織の体制にはなっています。ただ実質的には、これは会議ですので、実際に人間がいて動いているのは百年史編纂室だけということになります。ですから図書資料展示ワーキンググループもワーキンググループといながら、実際に仕事をやるのは百年史編纂室ということになります。関係組織とか体制等についてはこんな感じです。こういった体制がいま整えられて、仕事をしています。

レジュメの2ページにいまして、百年史編纂室の業務ということで、簡単におさらいをさせていただきます。まず、最近また学内で議論が出たといいますが、いいのかなという話になっているんですけども、「国立大学法人小樽商科大学創立百周年記念事業委員会小委員会要項」の第7条が、百年史編纂室根拠規定で、ホームページに全部載せてあります。

歴史的・学術的に貴重な法人文書が、滋賀大学も小樽商科大学と同じような規定がありますが、歴史的に貴重なものについては別に学長が定めるという規定になっていて、それどまりの大学が多いのです。本学も、法人文書管理規程がそのように定めていて、その規定を受けて、歴史的・学術的に貴重な法人文書は編纂室で集める。前の学長が呼び掛けまして規程化され、集めることになりま

した。

2005年に主に総務部門総務課系の文書、2006年に主に学務課関係の文書をたくさん受け取った経緯があります。ただ、あとは随時ということになっていまして、大量に受け入れることは、なかなか私の力量もありまして、追いつかない状況になっています。会議のときに、随時受け入れるということは強く申し出ているんですが、なかなかそれが守られているかどうかというのはわかりません。

けっこう貴重な、例えば、いま問題になっているのは、国立大学法人化をしたときの文書の5年保存の文書が、いまどうなっているのかということ。ここ滋賀大学もどうなっているのかなとちょっと気になるんですけども、例えば、広島大学であれば、メールの文面も集めていました。当然、大きな重要なできごとであった国立大学法人化等でもメールだけですませてしまった案件というのはあり、このままではデータが失われる。当時は、まだサーバーで集中管理などは、していませんし、各個人でパソコン等に入っていたりなどして、たぶん消えてしまう可能性はあります。広島大学は、阿部先生も見られたかと思いますが、小宮山道夫さんなどが中心になって、メールを集めるというようなことをしていると聞いています。小樽商科大学に関しては、そこまでやれないにしても、可能な限り文書を集めておきます。ただ5年保存は5年で必要がなくなるというだけの話であって、重要かどうかは保存年月とはまったく関係がありません。そのあたりをこれから気をつけて何とかしないととは思っているんですが、なかなか何も動きだせない状況が日々続いています。

あと業務について、少しおさらいをさせていただきます。これは何回もいろんな人に聞かれているのですが、旧植民地関係図書資料や卒業アルバムといった研究や教育にかかわるようなものを、なぜか百年史編纂室が、ほんとうは附属図書館なのかなと思うようなものもやっています。ただ位置付けとしてはやはり、例えばシェル文庫といったものは、手塚寿郎が研究の関係で買ってきたものだということで、本来きちんと中身の位置付けをしながら扱わなくてはならないものですから、そういったものも含めて、百年史編纂室が関与しています。旧植民地に関しては、ご存じのように附属図書館のほうで扱えないということで、捨てるという話もあったのですが、いまは完全に百年史編纂室の業務というか、関係の仕事という位置付けです。

資料の整理公開というところに入らせていただきます。実際の業務について、あとでまた何か関

係のことを思い出されたようなことがありましたら、質問していただければと思います。

資料の整理や公開ですけれども、整理の考え方等については、収集資料というのは、資料群ごとの管理と原秩序の維持を基本としています。保存措置としては、中性紙の箱や封筒を利用した保管およびマイクロフィルム撮影などの措置を可能な限り心がけることにしています。百年史編纂や広報活動での利用にあたり、資料にとっては安全性の確保、利用者には利便性を向上させるために、TIFF (Tagged Image File Format) 形式で画像化、これは保存用です。そして JPEG (Joint Photographic Experts Group) 形式で提供する。マイクロフィルムでできる限り撮ったうえで、それをスキャンニングします。スキャンニングは全部 TIFF でやっています。

それをホームページに載せるときには、文字に関しては、やはり JPEG 2000 がいいのですが、JPEG 2000 だと見られない人が多いので、私は国立公文書館のように両方つくって提供するというかたちをとらず、JPEG だけでやっています。ですから、旧植民地関係などの図書で印刷状態の悪いものは、非常にぼやけてしまって見えないものがけっこうあります。それをどうするかは今後の課題なんですけれども、とりあえず JPEG で提供することにしています。なぜ JPEG かですけれども、検索のところでもお話をさせていただくかと思うんですが、やはり PDF (Portable Document Format) ですと、最近はあまりないと思いますが、なかなか開かないという経験があるかと思うんですね。これは PDF はいったんデータをおとさないといけない形式なものですから、各自のパソコンの能力に左右されてしまう。JPEG であれば、もちろんサーバーの能力だけでいいので、アクセスがたくさんあったときに開けないということはあるんですけれども、基本的には全部 JPEG でやったほうがいいと考えられます。

ただ JPEG も残る形式ではないだろうと、デンマークにでいわれました。たぶんいずれは消えてしまう形式で、一番残りそうなのが TIFF であると。TIFF というのは、わりと重さが軽い状態でもいろいろな情報を入れられる形式でもあるので、たぶん TIFF でとりあえず何でもかんでも取っておいて、それをその都度、そのときに合わせた形式で提供していくことが肝心だろうと思われま。あと、PDF に関するもう1つ、実は大きな問題があります。これはまさに私が北欧のアーカイブズに行っていることの大きな意味にもなります。英語ですと、例えば、ウムラウト (Umlaut : 母音交替現象) 等がなくて、あまり文字化けとか起こらないんですけれども、特にアイスランドの

言語ですと、古英語みたいな感じになるので、PDF はちょっと古くなるとすぐ文字化けするんですね。これは日本語でもそういう問題が起こります。

ですから、文字が多様にある国ほど PDF の問題に悩まされていて、10年するとそのときのバージョンでは読み込めないということが、日本語にも起こりえそうなんです。これを北欧の人たちはもっと敏感に、小さな人口の少ないところですので、なかなか技術が追いつかないという問題を抱えていて、文字形式のことはほんとうに悩んでいます。英語圏を中心につくられていますので、あまり北欧や日本のことを考えてくれませんので、PDF はだめなんです。特に、事務の方が考えそうなことは、総務課の文書などを PDF で取っておいて、10年後に PDF で見られればいいと思う方がいるかもしれないんですが、それは大きな間違いで、その10年後にある PDF の閲覧ソフトだと、いまつくった PDF のデータは文字化けしてしまっで見られないということが起こります。これはたしか 2006 年に北欧のアーカイブズ全体で確認されました。その説明を受けたときに、そういう話をされていました。ですから、これは日本でもたぶん同じようなことが起こりうるだろうなと感じています。

実はちょっと余談なんですけれども、デンマークでは、例えば、事務の方がワード (Word) でつくったような文書というのは、Word のソフトハード機械を取っておくんですね。それを 20 年後も見られるようにしておきなさいという規定になっていますので。いまのパソコンを 1 台取っおいて、同じ状態で見られるようにする。ただ、データの更新だけはできないようにする。何かの手はずをして、情報公開に対応します。

以前、北欧は 40 年保存でした。ただそうすると、現用期間、40 年間保存しなくてはならないということだったんですが、電子化の時代になってしまっ、40 年という期間が長すぎるものですから、20 年に圧縮して、短くして、20 年後までは、現状のままちゃんと閲覧できることが義務づけられました。日本に関して言うと、まったく同じ議論ではないんですけど、たぶん PDF ぐらいで思っ、ってしまっている人が多いのですが、それはちょっとまずいということです。私がいま考えているのは、そこまでシビアなことを日本の「情報公開法」では求められてはいないので、大量に事務の人がつくった文書などをスキャンニングしてしまっ、TIFF にして取っおこうかと思っ、ています。TIFF にしておけば、何年かたっ、て公開ができるようになったときに、そのときの形式に合わ

せてホームページに載せられると考えています。もちろん、紙でもちゃんと保存するんですけども、ご存じのようにコピーは20年ぐらいしか持たないと言われていています。いま使われているプリンターとか、そういったものは状態にもよるし、偶然見られるということはあるんですけども、短いもので20年、もっと短いかもしれないと言っている方もいます。おそらくスキヤニングしてTIFFにしておくことが一番安価で、取っておくにはいいかなと考えています。

さらに一番いいのは、白黒で撮影してマイクロフィルムにして、いま電子画像をマイクロフィルムにする技術も確立されていますので、そういうことをしてもいいんですけども、ものすごく高いのです。コピー機でどんどんスキヤニングして、TIFFにしておけばいいということです。そういうことを日々、ほんとうに地道にやっているということです。ほんとうにこんな話を学内でしていると、「何を先のことをいっているんだ」といわれるんですが、百二十五年史でそうしておかないとだめなんだよということは、いつも私は繰り返しいっています。

【阿部】その文字化けの問題も、その電子的につくった資料、たとえば植民地に関する資料ですと、デジタル化してPDFに移行する。この場合には文字化けの心配はないわけですかね。

【平井】そうですね。ただ、そのPDFがほんとうに何年かすると見られるかどうかというのは、わからないんですね。文字化けの問題はないんですけども、PDFもJPEGも閲覧のための形式だという位置付けにしておいていただけたらという以外ないです。あくまでも保存はTIFFでやっておいてください。いま、たまたま私も実際、例えば新聞なんかはJPEGではどうしてもうまくいかないものですから、『緑丘新聞』はPDFで載せています。それは、そのとき使えるいろんな形式の1つというような位置付けで、PDFも便利な面がありますので、使っているということです。

整理をし、公開をしていくということですが、実際、以前の百年史編纂は、ほかの大学の年史編纂というのを見ていると、私のような素人からすると、自己満足の世界にしか見えなかったというのが正直なところです。

自分が百年史編纂をやるうえで、自分のイメージどおりにやるということではできませんので、私の場合は、もうほんとうに何でもまねなんです。オリジナルというのはほとんどないのです。1パーセント以下だと思います。ほんとうにほかの人がいろいろ考えたアイデアを組み合わせることで、日々の仕事をつくってしまっています。8月に一橋大学の方とか、学習院大学の方とか、東

京大学の方とかと話をする機会があって、今日の話の一部をちょっとお話したんですけども、やはりびっくりされたんです。実は国内で、みなさんのやられているいろんなものを組み合わせて仕事としてはつくっていて、電子化や検索システムについても、いろんなところからちょっとずつ技術をもらってきているというのが実際のところですよ。

何を申しあげたかったかと言いますと、以前、例えば、旧帝大系の年史編纂は、たしかに整理らしきことはやっています。しかし、実際には20人程度でやっているところが多くて、整理できる資料の量が、おそらく全体の数パーセントもいかないぐらいしかない。東大は現用文書の整理が一番いい大学ですので、あそこはちょっと例外なんですけれども。ある大学は、何が何だかわからない。まさに最初に私たちの日本史の教員が言っていたように、実質的には直感で資料を引っ張り出してきてという状況があったのではないかと思います。長くやっている年史編纂室もあります。何か目録らしきものをつくり、必要だと自分たちが思っているものを整理していることはわかるんですけども、第三者がまったくアプローチできないとか、出版物を批判しようとしたときに、資料を1から整理しないとアプローチできない、実際には何もできないということがあったのではないかと思います。

そうではなくて、小樽商科大学では、浜林正夫先生がされて、五十年史はいいものをつくったんですけども、資料を自分たちのこのみで扱って、自分たちの好き勝手なテーマで書いたというような批判を卒業生がけっこうしています。こういうテーマは全然扱っていないとか、そういう批判はあったということがあります。できれば、半加工というのはちょっと変なのかもしれませんが、ある程度のところまで、まさにこれは百年史編纂ではなくてアーカイブズになってしまうわけなんです。アーカイブズ的な仕事をきっちりやっておいて、もし荻野先生が書かれるものですか、あるいは小樽商科大学が出すものについて批判があれば、同じように資料を扱って、どうぞ別の批判をしてくださいということまでをしないと整理にならないのではないかと、ほかの大学の年史編纂を見ていて思いました。

このようにいうと、何か偉そうなことをいっているような感じになりますし、「何もわかっていない」「日本史の整理とは違うんだ」と実際にいわれてもいますが、私としては、やはり誰でも資料にアプローチして、『小樽商科大学百年史』というものが、10も20も出てきてもいいと思っています。

て、全部内容が違っていてもいいと思っています。そういう状態にできればいいなという理想なんですけれども、そういう観点でずっと取り組んできています。

そういったときに、ただ画像や所蔵資料の目録データを簡単につくってというだけでは、たぶんみなさんがアプローチすることができないのです。例えば、滋賀大学の先生が小樽商科大学の資料を扱おうとしたときに、以前ですと、阿部先生や菊地さんが何回も来られていますけれども、わざわざ来ていただいて、卒業アルバムとかいちいち見なくてはいけないというところを何とか減らしたい、実際は来ていただくほうがいいだろうと思いますし、私としても直接お会いしてお話したほうがいいと思いますが、できればその前の段階の作業は、可能な限りこちらで、みなさんがやれるような状態までやっておきたいと思っています。

どんなことをやっているかということ、ちょっと具体的にお話しさせていただければと思います。RDBMS (Relational DataBase Management System : リレーショナルデータベース管理システム) と何か偉そうな専門用語で書いてありますけれども、これはリレーショナルデータベースのことです。検索システムをつくることにしました。これはあとでご説明しますように、要は画像化が16万コマできてしまったものですから、いよいよ交通整理をしないとどうにもならない。16万コマをすべてホームページにただ並べてしまって、クリックすれば開けますよといっても、16万コマもホームページにあったとしても、誰も扱えないわけですね。

以前から検索システムをつくらうということは、私はちらちらと思っていたんですが、なかなか踏ん切れなかったのです。撮影を業者に頼んで、手元に資料がないということもありまして、検索システムをつくってしまおうと思いました。ただ予想していたよりもやはりたいへんでした。

まずサーバーのOSの名前すら、私は知らなかったんです、2008年の6月の時点で。そのところから勉強してというレベルから始めました。あと、検索には命令文を入れなければいけないんですけど、SQL (Structured Query Language) でやっていますので、その命令文もドリルを買ってきて勉強しました。そういうのも何が何だかさっぱりわからないんですけれども、当時いた山畑倫志くんがテキストを買ってきて、二人であだこうだと言いながら勉強して、彼もまったくの素人で、私も素人でした(特に私の方は)、二人ともまったくわけがわからないという状態で始めて、最初はほんとうにとんちんかなことばかりだったと思います。そのような段階から作業を始め

ました。

やはりここで、道具というものの整備も必要だと思いました。例えば、先ほど滋賀大学経済学部史料館で書庫を見せていただいて、例えば、桐に変わる箱の中に入っていて、整然と整理されていたということを見せていただきましたけれども、ああいった整理ももちろん必要ですし、それを扱うようにするための道具を、うまく使えるようにすることも大事です。いままさにインターネット時代ですから、これを使わない手はないわけです。それを使うと一気に世界が広がるんじゃないかなと、いま実感しております。

ただ、こんなふうに偉そうなことをいってはいるんですけども、実は小樽商科大学のシステムがまた壊れたら、1から作り直すにはどうしたらいいだろうかということをお心配しながらやっちはいるんです。二人でつくったものですから、彼がやったところが私にはわからなくて、私がやったところは復元ができるんですけども、いまはもういないのです。そのときはそのときでまたゼロから、とりあえず勉強してやらないと無理だなとは思っています。プロみたいにはぱっとつくれるものではなくて、マニュアルを読みながら日々積み重ねてつくっていくんです。ですから、何か壊れたら、バックアップはしているんですけども、ぱっと組み立てられるようなものでも実はないのです。

レジュメをごらんください。こんな感じで検索システムのイメージを持っています。利用者がいて、実は検索用のサーバーをつくります。滋賀のほうでもサーバーが設定されるとのことですが、検索のサーバーをつかって、目録のデータは別のサーバーに実は入れています。それともう1つ、画像データ用のサーバーというのがもう1個あります。いまは3つあります。3つをリモートで管理して、利用者には同じ画面で見られるようになっています。データは別々のところから実は持ってきているのですけれども、ネットワークでつないでやっていることになります。

極端な話、どこかお金のあるところでデータを一元的に持っていてもいいんですね。あと、デンマークですと、データは必ず同じ場所には置かないんです。DVDにして、コペンハーゲンに置く場所が1つあるんですが、そこから何百キロも離れている別の倉庫にまた別のDVDが、ものは同じですけども同じように置いてあるんですね。そして戦争などがあつたときにどっちかが残るといふようなことをしてあるのです。

例えば、滋賀で大容量の入るサーバーに、滋賀と小樽のデータを全部そこに入れておく。小樽も小樽でもう1つ同じものをつくっておくということをしておけば、どちらか壊れても融通ができる。そこから引っ張り出すための検索システムを、それぞれ好きなように別につくればいいわけなので、そういう考え方もあります。

【阿部】そんなこと全然考えていなかったな。たしかにいろんな被害の可能性を考えたり、そのサーバーの信頼とかいろんな意味合いがあるんでしょうけれども。われわれは、自分のところにあるものを自分のところ以外に置くことは、まったく考えたことがなかったです。でも、たしかにべつにここにしかなきゃいけないという理由は何もないわけですからね。

【平井】おっしゃるとおりです。

【会場】これから使うシステムは来週入るんですけども、現在使っているハードディスクを隣に置いておこうと思っていました。同じフロアに残しておこうと思っていました。

【会場】分散するのは、リスク管理の基本ですよ。

【平井】そうですよ。おっしゃるとおりです。

【会場】デジタルの世界で別にしておけばいいと思っていたんですよ。だからDドライブに入れていたものを、Cドライブに入れるとか。そうではなくて、物理的にかけ離れさせて置いておく必要があるんですね。

【平井】バックアップですとか、リスク管理って、今日はそういう話をするつもりはなかったので、ちょっと整理していないんですけど、重層的に考えなければいけないというところがあります。普段つくる場合でも、SQLのデータを入れるものは、容量が小さかったということもあるんですけど、別のサーバーをつくって入れたんです。そしてこういう検索システムが入っているような別のサーバーをつくって、もう1つ画像は画像で別につくっておくことで、バックアップだけではなくて、どれか壊れてしまっても、リカバリーするときにそれだけを直せばいいわけです。すべて全部壊れるということの想定とか、データの管理はいま阿部先生がいわれたように、あちらこちらに切り離しておくことをするとか、工夫というのが、電子情報の世界というよりも、普通のものの置き方と同じことなのかなという気はするんですけど。

【阿部】われわれはその検索システムとかサーバーをつくるときに、本学部情報管理学科のゼミにお

世話になったんだけど、でも、このRDBMSの観念って全然聞いたことがなかったし、その検索システムとデータを取っておくサーバーを分けるというのも初めて聞いた。でも、なるほどというか、それはそのほうがいいだろうなという気がするんですね。

【平井】はい。これは、いままさに阿部先生が聞いたことがなかったとおっしゃっていましたが、私も以前全然知らなかったんです。ただ結論を先に申しあげますと、勉強したほうが良いと思います。といますのも、結局私も今後これをやっていくかどうかわからないんですけども、1回自分で苦労してみて、失敗してもいいんですよ、途中まででもやってみると、変な言い方なんですけれども、口がちょっと悪い言い方なんですけれども、業者にぼったくられなくなるということですね。

【会場】なるほどね。

【平井】どこが手間かということがわかるので。これから発注をしようとして仕様書を書こうとしたときに、かなりわかった状態で書けるということですね。検索システムですね、あとでご説明しますが、リレーショナルデータベースとは別にXMLというものがあり、私のほうは、安易にリレーショナルデータベースのほうだけです。それがどう違うかと、何であちのほうがお金がかかるのかなということが、やってみるとよくわかるんですね。このリレーショナルデータベースは、実はけっこう身近ですね。おそらく病院で使われているようなカルテの管理はリレーショナルデータベースですね。あと、ATMはもう典型的なリレーショナルデータベースです。

リレーショナルデータベースというのは、IBMが1970年代の初頭に開発したもので、かれこれ40年近くになる、非常に古い「枯れたシステム」と言われるものです。無料のプログラムが山のようにネット上に出回っています。これは容易に、どこにでもあるプログラムですから、これにしたということなんです。

XMLは、日本のアーカイブズで2003年ごろからだと思います。リレーショナルデータベースは、最初の設定をしっかりとやらないとうまくいかないんですけども、われわれのように、もともとパソコンの設計やソフトの設計、プログラムの設計ではなくて、資料のほうから入った人間からすれば、整理の方法は決まっているので、そのとおりに使えばいいというわけなので、充分古いものでもだいじょうぶだということです。機能が非常に限定的なんですけども、全然結果からしてXMLと遜色ないものができてしまうと言えます。実際、ATMがほんとうに壊れることはないです。リレーショナルデ

データベースというのは安定力が抜群で、まず壊れることはありません。ただ、銀行が統合をしようとしたときに ATM が XML だと簡単に統合できるんですけど、リレーショナルデータベースだと、そこそ設計の考え方が違うと合わせることは難しいものですから、たいがい銀行の合併のときに ATM の統合作業が最後になります。というか、最後は結局、統合できないという状態になることもけっこうあるみたいですね。それもプログラムの問題だということがありますね。

【阿部】ちょっとこの話題を続けると、例えば、データそのものは小樽と滋賀で一緒に共有する。しかし、その検索システムは、小樽は小樽でつくっていて、うちはうちでつくっていると。それはデータを共有して、それぞれの検索システムで検索できるようになるんですか。

【平井】それは簡単にできます。それは何ていうか、データというのは単にリレーショナルデータベースの場合でいえば、表に並べているだけなんです。ちょっと先走って話しますが、要は XML 形式は、データが宇宙のちり状態になっていて散ってしまっているわけですね。教科書にはこういう書き方をしていないので、私なりの説明でちょっと間違っているかもしれませんが。要はそこにマークが入っていて、マークアップ式の言語が XML ですから、それぞれ名札がついていて、呼び出すと呼んでくれるのが XML なんです。

リレーショナルデータベースは、先ほど史料館で見たような棚がありまして、あそこにデータが収まっているんです。その収め方だけを、ここと小樽のほうで共有・共通化すれば、何らややこしいことを何もする必要がなくて、あとはそれを阿部先生が持ってくるようにするのか、私が持ってくるようにするのかというだけの話なので、全然共有するという点に関して気にする問題はないです。

ただ、セキュリティの問題はあるので、実際、リレーショナルデータベースのデータを共有することは、もう 1 つハードルはあるかもしれないです。画像のデータとかは別々に共有するほうがまだ簡単かもしれないですね。やろうと思ったらできますね。現実には銀行が世界中でやっているわけなんですけれども、そんなに難しい話ではないですね。しかもデータの組み合わせ方もほんとうに自由にやれるので、SQL の構文で全部決められますので、例えば、A と B の棚のものをいくつか持ってくるように、滋賀大学はこういう持ってきたりする場合に、小樽のほうは A と C だけにすることも可能ですし、ほんとうにそのへんは自由に検索式で決めることができます。すみません。何か私もこれはほんとうに専門ではなくて、ちゃんと把握してないところがあります。ちょっと説明がつかなくて申

しわけないんですけど、イメージとしてはそういう感じですね。

検索システムとしてはレジユメのような感じです。利用者、百年史編纂の執筆者も含めて利用者と考えていますけれども、検索サーバーをつくり、ソフトはコールドフュージョン (ColdFusion) 、いまナイン (Adobe ColdFusion 9) が出たと思うんですが、私たちはエイト (Adobe ColdFusion 8) を使っています。あとでご説明しますが、コアになるプログラムというのはアパッチ (Apache : Apache HTTP Server) を使っています。Apache は、シェアがたぶん 6 割、7 割以上で、世界中で使われている無料のプログラムですけども、そこで設定ができますので、OS は何を使っているかということは、実はわからないようにしてあります。そこで私はプログラムを書き換えて、出てこないようにしていますので、表には出さないのですが、ここのレジユメには書いてあります。レッドハット (Red Hat Enterprise Linux) を使っていたんですが、事情があつていまはやめました。Red Hat によく似たセントス (CentOS : Community ENTerprise Operating System) というのを使っています。64 ビット版をいまサーバーに入れて使っています。検索サーバーは 32 ビット版です。画像用のほうが 64 ビットを使っていて、あと目録データ用も、話がややこしくなりますが、32 ビットはデビアン (Debian) を使っています。画像用だけが CentOS の 64 ビット使っています。同じ Linux 系の OS を使っています。ウブントゥ (Ubuntu) という形式の別の Linux 系のもあるんですけども、圧倒的に安定度が CentOS ですとか Debian のほうがいいようです。なぜ安定度がいいかというと更新時期が長いんです。長く使うことを前提につくられている OS ですので、まさに先生方がイメージされる Windows ですとか、とは全然安定度が違います。ユニックス (Unix) 系というのは、パソコンは Mac (Macintosh) を使っていますけれども安定度抜群です。そのなかでもさらに長く使うことを考えてプログラミングされているものですから、みなさんもサーバーに Linux を使う。あの、マイエスキューエル (MySQL : MySQL Enterprise) ではなくて、マイクロソフトの SQL (MS SQL) があると思うんですけども、あれはすぐにウイルスに入られてだめになってしまうという話があります。

【会場】研究所のサーバーは Windows なので、今回その 5 年ごとのシステム更新が面倒なので、大学のサーバーにデータを移そうと思ったんですけど、システムを新しく作ってくれる業者さんが、大学のサーバーは Linux なので、いま使っているデータベースが使えない、プログラムを作り直すには時間も手間もかかるということで、できなかったんです。今までと同じ Windows のサーバーにしまし

た。

【平井】私の説明の仕方がちょっとまずかったのかもしれませんが、OSの話ですね、サーバーのOSと実際の端末とは考え方が別ですよ。データはそんなに移行するのは難しくないのではないかなという気が。

【阿部】それこそ、できないっていわれたくらいですから。

【会場】研究所でかつて非常勤で働いていた人がいま就職してSEになったので、その会社で作り直してもらったんです。もう少し彼に聞いてみます。将来的にすごく不安です。何十年と保存すべきデータが、ソフトがなくなるという理由で使えなくなるといけないので、ぜひ大学のサーバーにデータを移行したいなと思っているんですけど。

【阿部】望ましいのは、いろんな発想の仕方を、それぞれの部局がやろうとしているわけですから、それを大学として管理する。大学のなかでは、一元管理ではないんですけども、きちんと管理できるような体制は必要だと思うんです。サーバーはどこにあるかだとか、そこにつなげるときに、どのようにしたらいいかなどですね。だけど、そういう情報や知識というのは、それぞれの部局で、そうは持っていないんですね。勝手にいろんなところでばらばらにやっていて、それぞれにお金がつく、つかないで、事業が進んだり進まなかったりですから、ものすごく無駄が多いやり方を、大学全体としてはしているみたいですね。

【平井】たぶんそのへんもいろんな見方があるとは思いますが、まず、この滋賀大学もたぶん小樽と同じだと思いますので、どういう仕組みになっているかといいますと、またこれは今日の話とは余談なんですけれども、ネットワークの管理は、システムをばらばらにやっているように見えて、実は統一しておこなわれています。どういうことかといいますと、これはイメージとしては、ファイアウォールといういい方がありますが、壁が全部できているんですね。彦根全体のシステムがちゃんとできあがっていて、さらに阿部先生や江竜さん使われているパソコンにはファイアウォールがもう1個あって、そのなかにパソコンが入っているんですよ。そしてファイアウォールとファイアウォールのあいだの、これはDMZ (DeMilitarized Zone) と専門用語で中立ゾーンといいます。中立ゾーンでも何でもないので、ここにサーバーとかを置くようにしているんです。

例えば、阿部先生のパソコンに外から自由に入られてはまずいので、ファイアウォールが2つある

ところのなかに入っているんです。サーバーが外からまったくのぞけないと、ホームページの閲覧ができないわけです。それに関しては、ファイアーウォールとファイアーウォールのあいだに入れる。ネットワークの管理者の責任なんですけれども、そのあたりのセキュリティーはしっかりとおこなわれていると思います。小樽の場合ですと、総務課や財務課がばらばらにいろいろなシステムをつくってしまって、みなさん勉強してやっているんですけれども、実はネットワーク管理者は、すべてその動きというのは把握していて、押さえるところはちゃんと押さえるということをしているものですから、大学はわりと侵入という問題が起こっていない理由は、管理がきちりおこなわれているからです。私が実際にこのシステムをつくってみて思ったのは、やはり自由度がないと、仕事に合わせて自由につくろうと思ったときに、がんじがらめになってしまったら、やりにくくてしょうがないですね。

例えば、典型的なのが自治体で、無料ソフト1個も自由に入れられないんですよ、Macを使うなんてご法度で、Windowsばかりだとか、あるいは、いま関東の自治体はLinuxに移行しているところもあります。Linuxは無料なので、そういうところが出てきています。Linuxで事実上、WordもExcelも全部使えますので、便利なんです。いま大学に関しては、非常に高度で緻密な高口ジックでセキュリティーというのは確保されていて、わりと研究というものをするために自由になっている。研究というのは、ほんとうに個々の、例えば、菊地さんのように英文学をされている方たちや経済史をされている方などいろんな方がいますので、それぞれに規格が別々なものですから、統一してやるっていうことはできない。総務課も財務課もそれに巻き込まれてしまう。いまはばらばらになっているというのが、大学の現状かなと思うんですね。

たぶんいまぐらいが理想の状態ではないかと、私には思えます。あんまりこれ以上いわれたら、小樽もいまの担当者が替わったらどうなるかなと、ちょっと不安になってはいるんですけれども、今のままだったら自由につくれるなと思っています。阿部先生と観点がずれたところから申しあげているのかもしれませんが、私の印象としてはそういう感じなんです。システムの概略としては、こんな感じですよ。またあとでお話するかもしれませんが、ちょっとシステムから離れて、もう少し基本的なところを簡単にふり返っていきたいと思います。

3 ページですけれども、公開の範囲ということで、どういったかたちにするかということです。各課、各施設、各教員、卒業生などから受け入れた資料を電子目録化すると考えます。先ほど申し

あげたように、TIFF形式で画像データ化で基本となる「資料」をつかって、可能な限り、ホームページに公開する。公開方法は、ICA (International Council on Archives) のマニュアルに従うという方針でやっています。

そして目録データはいま申しあげたように、リレーショナルデータベースを利用して、添付する画像は原則としてJPEGとし、やむを得ないときにはPDFとする。大半の人が鬼籍に入っていますので、「情報公開法」の要件を満たす範囲に関しては法人文書等は公開して、旧植民地に関しては著作権等の問題がないものについて公開をするという方針でやっています。下記のような文言をホームページに載せます。

下記の資料を公開します。一応3つ考えています。「情報公開法」で公開要件を満たす資料と、2つ目に公知の事実が含まれている資料。つまり、本学がすでに広く公開してきた資料です。具体的な例に触れましょう。石川啄木の明治39年の取り調べの記録が問題になったことがあります。明治39年の『渋民日記』に出てきます。友だちからお金を借りていて、そのトラブルが石川啄木にありました。石川啄木が恐喝まがいのことをして、検察の取り調べを受けたという事件がありました。これは取り下げられたので、それ以上発展はしなかったんですが、その取り調べ記録がいまだに盛岡地検に現用文書として残ってしまっていて、これの情報公開請求をした人がいたわけですね。

ところが、盛岡地検は非公開としたわけですから、個人情報ですから。そして答申で検討されたのですが、公開せよという結論になりました。これはどうしてかと言うと、盛岡地検が過去に自ら、なぜ請求した人が知っているかということにも関係があるんですけども、繰り返し展示会で使っていたんです。いったん自ら公開した、「情報公開法」が制定される以前ですが、またさかのぼって非公開にするというのはおかしい。それは公知の事実ということで、そういう言い方はしていませんが、そういうのは公開されることになる。

ちなみに、取り調べ記録というのは、保存年限が15年です。ですから、例えば札幌医科大学の心臓移植の問題のような記録がいまどうなっているのかというのは、実はみなさんも関心があるところなんです。こういった移管されないものを自由に、現用文書を作成した人が廃棄できてしまう現状が、いまでも続いています。特に取り調べ記録などは非常に面白いものと言ったら、不謹慎かも知れませんが、歴史的にも関心があるものは数多くあります。

いままであまり厳密に法律がなかったものですから、管理がおこなわれてこなかったものですから、何となく、変わった資料は、現用文書として持ってこられたんですけど、いまはとにかく捨てるという話になってしまっていますので、今後どうなるのかなとちょっと不安ではあります。そういったことにも研究者として、目を光らせてほしいなという気も実はしています。

あと3つ目としましては、原本またはそれに類する資料が国立公文書館などで公開されている資料。滋賀大学も小樽商科大学も法人文書の大半が実は控えですので、同じものがもうすでに国立公文書館で公開されているということがけっこうあります。例えば、各大学でわりとていねいに扱われているというか非公開で扱われる、教職・公職追放関係の資料などは、実は国立公文書館に行けば多くの資料が見られます。あのような資料が国立公文書館で見られるにもかかわらず、その前提になった資料を見せないというのは、ちょっとおかしいのではないのかというところがあります。ただ、扱うときには、大学にある資料のほうがぶ厚くなっていますので、気をつけながら公開しないといけないんですが、基本的には同じ資料であれば公開していく方向で考えています。

そして、類するといっているのは、国立公文書館は、ご存じのように1923年以降、彦根は関係はないかもしれませんが、各高商系の資料に関しては、1923年以降しかありません、関東大震災で焼けましたので。ですからそれ以前のものについては、もし国立公文書館に残っていれば公開されていたろうという感じで、推測しなくてはならないところもちょっとあります。このへんも、きちんと大学アーカイブズをつくって、ルールづくりをすればいいんですが、一応こんな感じで、やや狭めで考えて公開するという方針でやっています。

先ほどの検索システムですとか、公開の一番のきっかけになったのが、次の概算要求の特別教育研究経費。これはいまさらご説明する必要はないかと思うんですが、滋賀大学よりもたくさんの金額をいただいてしまいまして申しわけありません。ほんとうにこれは助かりました。1,200万円交付されました。大半は、私のほうは、例えば検索システムをつくるとか、あるいは加工することに使ってしまおうという発想も生まれるかと思うんですが、ひたすらTIFF形式画像にすることだけに集中しました。その結果、すごい数で、ここまでできるとは思わなかった。16万コマの画像ができてしまいました。法人文書等に関しては、約5万コマぐらいあり、目的としては、旧植民地や貴重図書がメインで、法人文書等は旧植民地に関係があるという位置付けでやってはいます。小樽商

大『緑丘新聞』や旧植民地関係の貴重資料あわせて、合計16万コマの作業をまさにしています。

去年は画像化を3月31日に最後のぶんを受け取ってやったんですが、その日は私一人でしたし、ほんとうにできるのかなと思いました。学内の教員は反対をしていたんですが、人を一人、ご存じのように山畑くんをつけてくれまして、それで二人がかりで途中まで作業をしました。今年はさらに山畑くんの後任が一人いたんですけども、途中で事情があって辞めました。9月からまた二人来ましたので、続きの作業をしまして、3月までに一応終わらせる予定です。ですから、「検索システムをもっとちゃんと見やすくしろ」というようなことを外部の方からいわれてはいるんですけども、いまはひたすら画像を載せることに、とにかく集中して作業を急いでいるという状況です。逆にいうと、こういうことがなかったら、たぶん検索システムも生まれなかったということがいえます。

全体の仕組みといいますが、これがまさに何と言いますか、いまやっている仕事ということで、次のところをご説明したいと思います。レジュメ4ページのところです。

百年史編纂室は、ほんとうに、これではアーカイブズの説明ばかりになってしまいますけれど、やはりアーカイブズの仕事をせざるをえないところなんです。一応、百年史編纂なので、通史編、各論と、あと写真集を2011年7月7日出すということを目的にやっています。それが最終的な出口のところになります。資料集をつくるという話が最初ありました。東大ですと、10巻にも及ぶ、大量の日本史の院生、オーバードクターを使ってつくってはいるんですが、つまりあれも、これまた日本史の先生方に文句を言っているような感じなんですけれども。そこにたまたま参加していた人たちが選んだものを、膨大な時間を使って翻刻をして、ほかの資料整理はそのあいだとまってるわけなんです。翻刻したものをそこに載せるという作業が、伝統的に年史編纂ではおこなわれてきました。本学の教員もそれをやると言っていたんですが、私しかいなかったんで、そんなことはできないと私はいいました。それよりも、そのときは画像はまだなかったのですが、例えば全部スキャンして、翻刻をする時間があったら、コピーをして載せたほうがいいのではないですかという話をしていたんですね。それが今回16万コマできたことで、一気に実現の方向にいったわけです。

ホームページに随時掲載していくことで、翻刻などもやりたければ、それを利用してやっていけ

はいいいわけで、できあがったところの一部だけを印刷して配るという形式ではなくて、とりあえずやれたところまでをどんどんホームページに載せていくことで、それを量的な資料集というかたちにしたほうがいいのではないかと私は言いました。いまからご説明するような仕組みを考え出しました。

検索システムは枠組みをつくって、検索式や用語を工夫し、徐々にアプローチしやすくする。ISAD(G)2 に合わせて、EAD (Encoded Archival Description : 符号化記録史料記述) というアーカイブズの形式があるのですが、それに合わせて一応つくっておいて、まずいいところはあとから直しながら、資料集を充実させていくというような方向に持っていきたいと考えています。

レジユメにありますように、流れとしましては、歴史的・学術的価値のある資料の収集をおこないます。それを物理的に仮の整理をしたりですとか、中性紙、これは以前、旧植民地ものをやるという名目でたくさん買ってもらったものがまだ余っていますので、それを使いながら、中性紙の箱に入れたり、マイクロフィルムをつくったりといったような作業を日々重ねていきます。映像なども集めています。

それを資料の利用公開のための準備(レジユメの)ということで、これがまさに一番手間のかかる作業だと私は考えていますが、これをきっちりと日々やっています。例えば、先ほどいいました、リレーショナルデータベースに目録データを作成するとか、紙資料というものを TIFF 形式で画像化する。基本的には、自分でこのカメラで撮影をしたりだとか、コピー機でやったりするんですが、お金があれば外注をする。お金がなくてもスキャンニングすればできるという体制。予算がゼロでもできるという、状況にはなっています。モノ資料も撮影しています。このようなことを順番にやりまして準備をする。

つぎにホームページの作成をしまして(レジユメの) 動的なまさに『資料編』の資料集を作成して提供する。載せられるものはどんどん載せていく。ここが出口のところになって、利用者のみなさんには、ここが窓口になります。編纂室および史料展示室のホームページ検索システムを作成して交通整理するというシステムにしています。百周年終了後は、実際にやれるかどうかは知らないですけども、史料展示の企画に併せてインターネット企画展をやってみようかなということもいっています。

レジユメの、のところで作業がすんでしまえば、まだ載せていないようなものを含めて、例えばレファレンスをしたりとというようなことも自在にできます。これはオンデマンドでデータが出てきますので、こういうのがありますとか、そういうこともいえます。

また自校史教育をやったりとかしていますので、学生にもホームページを見せて、今年の授業は前期だったので間に合わなかったんですけども、来年からはじゃんじゃん資料を見せながら、この授業をやるのかなと思っています。そういうことも可能です。あと展示などもデータを、つまりコアのデータをここでつくっていますので、どういうかたちでも使えます。あるいは、外部の方がこういう画像ありませんかと、『北海道新聞』の人なんかは、そういつてきます。そのときにホームページを見てくださいと。先日も小林多喜二の写真が欲しいという問い合わせがあったんですけど、ここのホームページを見てください。卒業アルバムがありますので、どうぞご自由に使ってくださいのひとことで、もう5分ですむわけですね。

以前であれば、他大学の批判してはいけないんですが、年史編纂室にあれば、それをわざわざスキャンして CD-R に入れて送るといった作業をやっていたんですけども、そういったことも、ほかの仕事をやりながらすませてしまうということにしています。

基本的なデータというのは、今日は残念ながら、私のパソコンが繋がられませんので、デモンストレーションができないんですけども、定期刊行物をつくるときも、実はこのデータを使っています。組版も含めて自分でやっていますので、この写真がいいなとか思ったら、ぱっと持ってきて、これはやめようと思えば消したりとかも画面上でやれてしまうということです。あと出版業務も同じようにやれますし、そのほか外部の刊行のお手伝いなどもこういった仕組みを使ってやることができます。もうちょっと具体的に、次のページに書いてあります。レジユメの5ページですね。

、の作業のところで、実例が並べてあります。例えば、ホームページをつくる。データを整理すること自体でホームページができるわけですので、データ、こういったホームページの内容をどんどん増やしていくことがまず1つあります。そしてそのデータを使って、これはソフト自体が違いますし、考え方もまったく違うんですが、組版用の InDesign というソフトを使えば、資料展示、パンフレット、ポスター、ニュースレター、紀要でも何でもできてしまいます。特に、目録をつくるというときには威力を発揮します。まさにアーカイブズや、経済経営研究所では、刊行は非常に

大事です。あるいは、ホームページに載せてデータを公開していくというのは非常に大事ですので、まさにそれを内部でやれるというのを基本としつつ、余裕がないときに、外部に部分的に外注する。基本は、編纂室で業務が完結しています。

【会場】 ちょっとすみません、このレジュメ 5 枚目のところの『緑丘アーカイブズ』の下のところにホームページを DW で撮影とあるこの DW というのは、ドリームウィーバー (Dreamweaver : Adobe Dreamweaver) のことですか。

【平井】 これは Dreamweaver のことです、はい。 私は Adobe (Adobe Systems Incorporated : アドビ システムズ社) のソフトを使っています。結局普段は Mac Pro の容量をだいぶ増やしまして、ホームページ作成は、Dreamweaver で。プログラムはあとで出てきますので、ご説明します。Dreamweaver を使っているし、あと InDesign を使い、画像も編集は Photoshop (Adobe Photoshop) を使っています。Adobe は、非常に使い勝手は悪いんですけども便利ですので、使っています。ただ組版とかも、ここの先生でもたぶんいらっしゃると思うんですが、テフ (Tex) といって、自分でプログラムから全部やる人もいるので、InDesign を使わなくてもできるんです。ここに何を配置するかを打ち込んでいくやり方でやれます。私は Adobe のソフトです。Adobe の、実は問題点というのがあります、あそこは買収メーカーなんです。いろんな、例えば、ColdFusion という検索のためのプログラムやソフトも別の会社から買収したもので、InDesign も Dreamweaver も、それぞれ別の会社がつくったものです。Adobe でありながら非常に統一性が悪くて、ソフトごとに考え方が全然違うという特徴を持っています。昔から使っている人にとっては別に関係がないのかもしれないのですが、最近使い始めた人にとっては、何で同じ会社から出ているのにということにはなるかと思います。ただ、どれも発想としては同じで、デザインとテキストを分けるという考え方です。つまり、デザインはデザインでつくっておいて、統一して全部変えてしまいます。一番典型的なのは、この私のレジュメは、全部 InDesign でつくっているんですが、右上の小樽商科大学百年史編纂室の活動と『資料集』ですね、どのページも同じかたちになります。だから、これは統一のデザインで、1 か所しか私は入力しないんです。Word もそうだと思いますけれども、これで自由に変えられるんです。ページもですね、現在のページと書いてあるんです。それでページが表示されます。こういうデザインですね、今日お見せできないのが非常に残念なんですけれど、ニュースレターも同様につくります。ホームページもまった

くソフトの使い方は違うんですけども、考え方や発想はよく似ていて、デザインも統一させます。どのページも同じデザインにしておいて、テキストの部分は流し込む。もっと言えば枠でもいいんですよ、デザイン部分だけを業者につくってもらって、テキストだけをわれわれがつくるとか。大学って何か、発注すると全部やらないといけないと思ってしまって、大学のホームページであるにもかかわらず、文章は業者に書かせているのは、非常に稚拙なものをつくるということが起こり得ます。広報などの刊行物もそうですけど、そういうことはやはりしないほうがいいですし、もっと言えば、組版をやれる人にデザインだけつくってもらえば、非常に安価にホームページでも何でもできてしまうということです。

【会場】Dreamweaverは使いやすいですか。

【平井】はい、使いやすいです。Dreamweaverは使いにくいと言っている人もいますけれども、使いやすい最大のポイントがホームページビルダーと違っていて、自分で打ち込めるんですね。打ち込めるとはどういうことかと言いますと、カラーを緑に変えるのは、色を選択するのではなくて、何とか何とかというのを自分で打ち込むんです。

【会場】自分で打ち込んで、記号を入れて、それに反応するというかたちですか。

【平井】ええ。ですから、きれいに、いろんな色が、自由に入れられます。

【会場】じゃあ、自由度が大きいということですね。

【平井】自由度は大きいです。あとで説明しますが、まさにSQLの検索システムをつくるときにそれがないと不便です。デザイン系の仕事をする方と検索システムは、しばしばやっている業者が違って、あまり関連してとらえることがないんですけども、私たちのようにデザインもやるし検索システムもつくるといことになると、両方が自由にいたり来たりができるのは非常に便利なわけです。

【会場】わかりました。ありがとうございます。

【平井】こんな感じでサーバーにどんどん入れているデータを使って、InDesignを使っていうことを日々やっています。写真集をつくらなければいけないんですが、データをアレンジして、パネルにしまおうと思っているんです。同じソフトを使っていますので、大きくて見栄えのいいようにするようなデザインと、小さい写真集とか写真も含めて、配置の仕方とかを単にデータをこっちからこっ

ちに持ってきて変えてしまうというふうにしようかなと思います。ですから、これは簡単だと言うと、「おまえ、もっとやれ」といわれてしまうんですけれど。要は人間が非常に少ないことから、そういうことになったんです。一人でいっぺんにいろんな作業をしようと思っています。あと、人間ですら記憶がどうしても薄れてしまいますから。そういうことを、パソコン自体を駆使することで、5人、6人分の仕事をやろうと考えているということですね。ですから、ある意味人数が多いと、かえってできないのかもしれないと最近思います。

検索システムの必要性をもう申しあげる必要はないのかもしれませんが、あらためて押さえていきたいと思います。なぜ必要かということです。

『東京大学百年史』によって、年史編纂というのは、もう記念誌的なようなもの、個人の趣味、歴史学の研究者の趣味というものではなくて、学術的な成果、大学の評価を示すものだということになったというように一応いわれています。いまだに彦根の盲導犬のレベルかもしれませんが、各論文は無記名ではなくて、記名されるかたちへと変化しています。そうすると、それを担保するかたちで、やはり何らかのかたちで、ほんとうの意味のデータ等もきちんとどんなものに使ったかということを書き記すことが必要になります。しかも平行して、インターネットが日常的な研究の道具になって利用されている現状があります。必要な理由としましては、年史編纂つまり資料整理という理解されにくい仕事で、結局は盲導犬を連れて、トラックのおじさんに怒鳴られるような状態が続いているわけですが、年史編纂という理解されにくい仕事を視覚的に説明できる可能性、実際に理解してもらえるかどうかはともかくとして、関心を持ってくださった方は、ああ、こういうことをやっているのが、あるいはこういう資料を使っているのかと、即座に理解してもらえる可能性が出てくる。根拠となるデータを、大学の執筆者や関係者が独占することなく広く公開する。別の人々が、それこそ『小樽商科大学百年史』というものを別につくことも可能になる。

それから、仕事がシステムティックに進められます。ある大学の年史編纂が、いまだに18年目に突入して、おこなわれています。いままで、その助手の人は、もう何人も変わってきましたし、メンバーも最初からいる人は一人もいないということになっているのですが、全体の仕事というものを、たぶん誰も説明できない状態で、一応『通史編』、いろいろなものを出されてはいます。システムティックという点では、ほど遠い状況でして、単に個々の研究が積み重ねられてきたとい

うだけにしまっています。そうではなくて、どこまでやってきたか、どこまでどうやるのかということは、検索システムという、結果がすぐに出てきてしまうものを使うことで、把握しながら、みなさんが同じ仕事をやる。

それから、画像化するというので、遠方の人も含めて、多くの人の参加する読解作業が同時に可能。最初に申しあげましたように、16万コマというものを載せただけでは、たぶんできないので、検索システムというのが不可欠です。逆にいいますと、検索システムのいいことは、その画像と関連するデータを管理できますので、非常にいろいろな資料へのアプローチが容易になる。そういうことも含めて、検索システムというのは、やっぱり必要なのだろうと考えています。外注と内製という問題なのですが、これは、さっき結論を申しあげたと思いますが、大学アーカイブズで検索システムを持つところは多くありません。多くないというか、京都大学や、簡単なものを東北大学が持って、永田英明さんがご説明されたかもしれませんが、持っていたりします。

問題は、アーカイブズ学、資料学では、図書館学のような標準の検索システムにないので、外注するとすごい金額になります。丸善とか紀伊国屋が、標準の図書館のシステムを出していますけれども、小さい自治体、小さい組織のものであれば、100万円か200万円ぐらいで買えます。実際に、自治体がアーカイブズの検索システムというものをどのぐらいで考えていますかという、国立公文書館のアンケートがあります。やっぱり100万円ぐらい、みなさんが計上します。でも実際には、京都大学は、それ以上のお金をかけてつくっています。だから、やっぱり外注するというのは非常に難しいということなのです。

内製が可能かどうかということなのですが、これはヒントにしたのが、何で私が踏み切ってしまったのかというと、人文社会科学系の学会とか研究プロジェクトのホームページを見ました。たぶん、素人がやってそうなのを片っ端から見ても、やれそうなことをやればいい。人がやっているのだったら自分もやれるだろうと安易に思って、山畑くんの分野のインド学の論文の検索システムがつくられていて、あれだったらできるかなと思ったのが1つのきっかけだったのです。どうも、これは無料のプログラムを使っているなということもわかったので、そういうのを見てヒントにしました。最初に申しあげましたように、RDBMS でなければ、まず無理です。XML は、ほぼ業者に頼まないと、まだ難しい段階です。RDBMS であれば、最初に申しあげたように、無料のプログラム

がネット上に転がっていて、しかもそれにつわるやりとりがブログ上に書いてあるのをたくさんもいます。わからなくなったら Google で検索すると、答えが出てきますので、わからないことは全部それを見ながらやっていけばいいというぐあいになっています。

そういう感じで、二人で、だいたい実質的には2008年6月から2009年3月にかけてつくりました。実際に始めたのは2008年の9月です。それまでは、実はまったく違うプログラムをつくっていたので、その経験を生かしたのですけれども、9月くらいからやって、ColdFusion を使ってしまったのは失敗だったかもしれませんが、PHP という無料のものがあるのですけれども、その代わりに、一部省略しようと思って、17万円出して ColdFusion を買ったのですけれども、あれは使い勝手が悪くて、けっこう、いま悩んでいます。いずれ PHP に変えようかなと思います。PHP にしてしまうと、完全にすべて無料で、そこまでやれたらホームページで、検索システムのプログラムを公開できます。できれば、滋賀大学は滋賀大学で、そこからコピーしてもらって、サーバーにインストールをしてもらえれば、そのまま設定したら完成ということなのですが、そこまでやれるかどうか、ちょっとわかりません。いずれ、そんなこともやりたいなと思っています。

国立公文書館の人とも話したのですが、国立公文書館は高額の検索システムをつくっていますけれども、一方で、ああいう立派なものがあって、他方で画像も載せられる無料のものを小樽でつくる。非常に簡単なものなのですが、とりあえず立ち上げの一人とか二人でやっているところ、小さい組織では小樽のものを使ってもらって、国立公文書館のほうは仕様書も公開されていますので、業者に発注できるところは、それを使うとかいうこともあり得るかなということと話していたのです。

XML 形式というのは、先ほども言いましたように、データをばらばらに置いておけるのです。いま最近の、私は、このへんは専門ではないので詳しいことはわからないのですが、Excel とか Word も XML 形式になっています。ですから、1つ1つのデータにタグがついていて、自由に検索したり、まさに自在にデータを組み合わせて扱うことができるというのが、XML です。レジユメの次のページのところに図（ここでは省略）をちょっと書いてみたのですけれども、上が XML です。RDBMS というのは、先ほども言いましたように、枯れたシステムで、もうネット上に無料のものが転がっていますし、自由に使うことができるというものです。ATM などにも使われますから、

安定度は抜群ということになります。ただ問題は、なぜ業者さんはXMLを使いたがるのかというと、仕様書に書いて発注していると、途中で、いや、これだとやっぱりまずいな、変えてくれないということになるのが、しばしばあります。わからない人から発注を受けるとき、RDBMSはゼロからやり直さなければいけないことが出てくるのです。XMLであれば、あまりそういうことを考えずにできるそうなので、私もやったことがないのでわからないのですが、比較的、設計変更がしやすい。あと、データのシステムを統合するのに、XMLがやっぱり有利です。例えば韓国のように横断検索をやるとか、ああいったような方向性というのを強力に押し進めていくのであれば、やっぱりXMLでやっておいたほうがいいかなということになります。

レジュメの7ページに、検索図というふうに書いて、これも素人の見立てなので、そのぐらいの範囲で考えていただければと思うのですが、要は、データ1、データ2と、ほんとうに、ばらばらにデータがあるわけです。そこにマークアップ形式の言語のなかから、タグがついているのを引っ張り出して検索結果を出す。RDBMSというのは、例えばISAD(G)2でいうところのファイルですとか、アイテムだとか、そういったデータ群というのは、データ群ごとに固まりをつくっておかなくてはいけないという特徴があるのです。データの出し方とか、そういうのは、また別の話で、データの置き方を固めておかなくてはいけないというのが、RDBMSです。ですから、その置き方を変えたいとなると、設計が全部やり直しになってしまうので、そのところは注意が必要なところですよ。

ある程度、棚に置いてあるもの、それを検索システムを工夫して、結果的には、いま国立公文書館も、京都大学も、両方ともXMLですけれども、あれと同じ結果を得るということは、RDBMSでも可能です。もっといえば、京都大学という明確なモデルがあって、それをまねするのであれば、RDBMSでも何ら遜色ないものがつくれます。京都大学が一所懸命XMLで、どんどん改造して、いいものができあがったときに、RDBMSでまねして、まったく同じものをつくって、安定度抜群のシステムを立ち上げるということは理論的には可能です。国立公文書館に対しても同じですね。ただ、やっぱり、こういうふうにしたほうがいい、ああいうふうにしたほうがいいというのが出てきますので、そういった設計そのもの変更ということも考えると、やっぱりこれからはXMLだと思います。

ここまでが、今日の一応、メインのお話、百年史編纂室の活動です。

あとは法人文書の収集の範囲ですとか、検索システムのプログラム例ですとか、「公文書管理法」の影響とか、あと目録について、ちょっとご説明して、さらに時間があれば、ホームページを見ながら、この資料がどういうふうに使ったらいいとか、どういうふうに見たらいいかということをご説明させていただければと思います。

レジュメ8ページのところに、参考資料ということで、「法人文書の収集範囲」。これは、実は東北大学のものをかなり参考にしていますので、すでに永田先生が、どこかでご説明されたかもしれません。小樽商科大学も、去年、こういうものをつくって配りまして、つまり総務課から、どういう資料がほしいのと言われたので、抽象的な、一応、規程みたいなものをつくって見たらどうかと思って試みたことです。まだ学内で、一応、配っただけで、これできちとおこなわれているということにはならないのですけれども、一応、こんな方針で収集しています。

簡単に、ちょっと読みあげて、いくつかご説明しますと、収集する範囲というものが、文書というのは何なのかということで、「歴史的、学術的に貴重な文書を収集しています」ということが書かれています。これは繰り返しっているのですが、「法人文書の価値の重さ・軽さというのは、保存期間の長さとはまったく関係がない」。特に、学生関係のものが大学というのは短い傾向がありますので、つまり、だいたい5年保存なのです。5年保存でほんとうにやっていたら、小林多喜二や伊藤整の資料というのは、まったくなかったわけですから、そういうことを考えると、やっぱり長さというのは関係ないということは繰り返しいわないといけないということになります。

「以下のような文書を重点的に集めています」ということも盛り込んでいます。先ほどいいましたような、法人化とか、ああいったような諸制度の設置改変に関する基本文書とか、設置申請書とか、ああいったようなもの。ビジネス創造センターの分はまだ来ていませんが、かなりいろいろなものを集めています。

あと、大学および学内諸組織の運用および評価に関する基本文書等々ですね。ただ会議録はまったくまだ来ていません。これが全然見られていないので、『東大百年史』は、かなり評議会の会議録を使っていますので、それを見ないで、ほんとうにこのままやっちゃっていいのかなという感じなので、これもいずれ、考えないといけないということになっています。

総務課としては自分たちがずっと持っているつもりなので、それはそれでいいのかもしれませんが、もし廃棄するようであれば、こちらでちゃんと受け取っておく必要があります。本学の主催する重要行事に関するものとか、会計・財務とか、予算の示達書とか、そういったようなもの。本学の教育および学生支援活動に関する基本文書ですとか、ここにも入れておきましたが、大学に関する重要な事件等々とか、レジユメの9ページには大学組織の構成員の在職・在籍・外留・出向を証明する基本記録。これが非常に小樽では問題になっていまして、京都大学では法人文書は紙媒体が中心なので、全体として紙に残しておけばだいじょうぶなのですが、小樽の場合は、そうになっていません。学生の記録関係というのは、かなりサーバーにしか入っていないものがありまして、消えてしまったらどうするのだろうと思っている文書があります。

あと、教職員名簿もつくるのをやめてしまいました。ですから、ここ数年のものは、もうわからないです。特に非常勤とか、短い勤務の方ですとか、ほんとうに出てくるのかなという感じです。京都大学は、あえてつくり続けていますので、職員のことを全部わかるのですが、小樽の場合、全然ないので、これからどうなってしまうのか。すでに、『緑丘五十年史』のときに教職員の一覧が不完全で、あそこに名前のない人がいるようです。それが文部時報とか、そういうのでしかわからないとか、そういうレベルになっていまして、最近のものなんかだと、さらに、どうやって、他組織から見ようとしたときに、果たして見せてくれるかどうかということも含めて、何か考えておかないといけないと思っているのですが、たぶん『百二十五年史』は、そうとう苦労することになるのではないかということが、いますでに予測されます。

まして、『百年史』がない大学で、法人化を通過し、また「情報公開法」、「公文書管理法」等がきたとなると、あと10年すると、ほんとうに悲惨なことになるのではないかということを、ちょっと危惧します。小樽でも不十分な状況です。

「以下のような文書は原則として収集しません」。こういうところを設けるか、設けないか、実は政策的には大きなことなのです。自治体で見ますと、神奈川県は収集する文書を列記しています。収集しない文書は列記していません。逆に、沖縄県は収集しない文書を列記しています。それは考え方がいろいろとありまして、東北大学は両方列記する併記になっていまして、小樽もそれをまねしたのですけれども、これをどうするかということも、けっこう実は政策的に大きな問題です。

余力があれば、収集しない文書を列記するという沖縄方式がベストだろうと思われます。神奈川のようなやり方をしてしまうと、狭くなる可能性がある。まだ正直、こういった文書を、どう集めればいいのかわからないものですから、収集する文書と、しない文書を列記することで、グレーゾンも、たぶん出てくると思います。それについては聞いてくれという意味で、収集するものを最初にあげておいて、しない文書というものもあげておくというようなかたちで、将来的には、たぶん、収集しない文書だけをあげるような方式にしたいと、私は個人的には考えています。

あと、「編纂室の受入後の法人文書の扱い」ということで、教職員の関心というのは、個人情報の扱いだとか、そういうものも含めて、きちっと書いておいて、あと、ほんとうに利用させてもらえるのかとか、そういったようなことも含めて、「無条件で利用を認める」と書いています。これはこれで、けっこういろいろと問題があるし、アーカイブズ学は、年史編纂ともかかわって、特にいえるのかもしれませんが、利用という問題が起こってきってしまうものですから、滋賀大学の附属史料館が利用させているので、非常に博物館的な施設としては珍しいのですけれども、アーカイブズというのは、まさに利用の問題があります。どこまでなくしてもいいかという、政策的なところを考えることが肝心なので、ここではさらっと書いておきました。

これは、なくすリスク、破損するリスクというものを考えながら利用の範囲をほんとうは考えなくてはいけないので、ほんとうは、このあたりのことは、きちっと議論しなくてはいけないのですが、ここでは、一応、「無条件で利用できます」ということで、ただし制限を加えることもあるというようなことを書くような方式にしています。

次のレジュメ 10 ページ目のところです。検索システムのプログラムの例ということで、『緑丘新聞』の記事検索です。これは『緑丘新聞』の記事検索データなのですが、この裏側がどうなっているのかというのが、この 2 ページ目のプログラムが、実はこうやって書き込むと、これが出せるのです。そうすると、誰でも自由に、こういうふうに見られる。こういうきれいな画面で見られるということです。ちょっとだけ説明させていただくと、3 行目のところに「SELECT」と書いてあります。「アスタリスク(*)」が書いてありまして、これはオールという意味です。全部という意味で、これは SQL 構文なのです。「FROM midorigaoka」下のデータのところに、これは midorigaoka の自分でつくった表があるのですけれども、そこから、要はデータを引っ張ってきなさいという命

令文を書き込んであるわけです。条件文を自由に変えていってやることで、例えばヒットさせないということもできるわけです。1行減らせばいいのです。いまこれは全部の表を、下の表があるのですけれども、このidというところを除いて、「title」とか、「authors」とか、「data」とか、いろいろなものがありまして、そういうデータを全部ヒットさせられるようになっています。そうなるように書かれているので、それを例えば、「authors」はヒットしないようにしようということも自由に書き込めるのです。これは、まさに自分で検索システムをつくと、こういうことも自由に設定を変えていくことが適宜可能です。

あと、普通のホームページの書き方ですね。htmlで『緑丘新聞』を書いています。これは、『緑丘新聞』検索結果一覧、ここに書いてあるのも、まさにこれがそのまま出ているわけです。タイトル1、タイトル2、著者、日付、号数というのが書いてありまして、これを表示させなさいというふうに書いてあるので、出てくる。さらに、今回は載せませんでしたけれども、もう1つプログラムをしてやると、次に展開する画面についても自動的に全部出てきます。イメージとしては、この表というのは、いま瞬間的にできているのです。あらかじめできているわけではないのです。初めて利用者が入力して、こちらのプログラムの命令に沿って、データが生成される。書かれたものではないのです。初めてデータができあがって、だから、いろいろなデータの組み合わせが当然可能になるし、そういったものを利用者たちがつくるとというのが検索システムです。

RDBMSというのが、10ページの下半分ぐらいのような表のデータ（ここでは省略）というのが、あらかじめあって、そこから自由に出して、つくるといふものなのです。この下の表が、実はMySQLというのを使っています。たぶん、MySQLはあまり日本で普及していないのですが、ヨーロッパではシェアがかなり多くて、もしRDBMSでつくられるのであれば、MySQLが、わりとお勧めです。ただ、使い勝手がいいかどうかはわからないのですが、ネット上に情報がありまして、使い方を教えてくれるので、使えるのかなと思います。

検索システムのことは、あとでまたホームページを見ながら詳しくご説明しようかなと思っています。ひととおりレジュメに沿って、ご説明させていただきましたけれども、あと余談話、「公文書管理法」の影響ということ、ここで、触れさせていただきます。

ご存じのように2011年4月から「公文書管理法」が施行されます。「情報公開法」のとき以上に、

国立大学法人の文書管理というものが大きく変わります。何が変わるのかというと、ここの時点で百年史編纂室の在り方を変えていかなければならぬのですが、この表のとおりです（ここでは省略）。「情報公開法」では、各組織ごとに文書管理のやり方というのは、ばらばらでよかったのですが、政府のほうが、もう統一したやり方を定めてしまったというのが「公文書管理法」ということになります。どういうことかといいますと、大学内の各部局でつくられた文書というものを、これは自治体では、大阪市とか、そういったところはもうすでにやっているのですが、総務部が一元的にすべての文書を管理徹底するというのが、まず1つになります。

速やかにすべての文書のリストを作成し、現用の段階から、きちっとリストをつくって、引き渡し時に移管先による所在確認の徹底がおこなわれて、管理責任の明確化となります。これはどういうことかといいますと、渡すときに、渡した人間と渡された人間が両方、判を押すのです。その時点で管理責任が、ある何月何日という時点から変わるので、いままでのように、作成者が自分で捨てるということであれば、途中でなくなってしまういてもわからないのです。保存期限まで持っていましたといってしまうえばそれで終わりなのですが、ある時点までないといけないというものを今後、こういう管理方法でやるわけです。

ですから、情報公開のときにあったのですが、うやむやのまま5年たつと時効のように消えてしまったのが、いままでの文書管理の在り方だったのですけれども、きちっと渡すまでは持っていないといけないとなります。神奈川県立公文書館の石原一則さんのお話を聞いていると、神奈川県ですと、1枚たりとも文書がなくなるということはありませんとおっしゃっていましたから、「情報公開」で、ない文書と、ある文書というのが、きちっと線引きできて明確だということで。以前、こういうことがあったということをおっしゃっていたのは、現用管理者が1枚なくし、公文書館に渡したと主張したということだったのですが、石原さんの判はなかったのです。つまり渡されていなかったということが、結局、あとでわかったのですが、そういう場合に、管理責任がしっかりできているというお話を神奈川県はしていました。この「公文書管理法」ができると、これは国立大学でも同じことになります。

問題は、その移管先というものが、先ほどのフィンランドとデンマークの話ではないのですけれども、日本では2つの考え方を入れることにしたのです。1つは、国立公文書館に移管するという

ことも選択できますし、各大学でアーカイブズをつくって保存するということもできるという解釈ですから、国立公文書館のほうは、どちらかという、一元的な管理を目指しているのではないかと私には感じられるのですけれども、実際は、京都大学でも大学文書館をつくってしまいました。すでに一元的ではない現状がありますので、もし大学がつくりたければやりなさいと。実際には、多くの大学は国立公文書館のほうに移管することになるのではないかと思います。

ただ、そこが1つ問題で、これは評価選別の詳しい話は、また1つの報告になってしまいますので、詳しくはお話できませんけれども、国立公文書館は、あくまでも社会にとって重要な文書を保存する場所です。滋賀大学にとって重要な文書を保存する場所ではないということなのです。でも、もし滋賀大学にちゃんとしたアーカイブズがあれば、そのアーカイブズというのは、滋賀大学にとって重要な文書と、社会にとって重要な文書の両方を保存するという施設になるわけです。

では仮に、国立公文書館だけしかない。そこにしか一元的な管理しかしないと、ということが起こるかといいますと、滋賀大学の資料が全部捨てられることがあり得るわけです。これはサンプリングの理論というのが、ある程度、研究が進んでいまして、同じような組織をいくつも全部、それぞれに評価選別をして、きっちり残すということはやっていられませんので、国立大学が80ぐらいあって、そのうちのいくつかの大学だけについて、残すということで考えていくと、ある大学の資料に関しては、すべて廃棄される。これは理論的な話なので、実際はそうならないのかもしれないのですが、そういうことが起こりえるということです。これはあくまで国立公文書館には、社会にとって重要な文書しか残らないということです。そのことをもうちょっと考えたほうが良いと思います。

もう1つは、組織というのは、大きくなればなるほど捨てられる文書は増えます。よく評価選別の理論は、ここでは詳しくご説明しませんが、調査だと、5%ぐらいという数字が出てきます。でも、あれはとてつもなく大きな組織の話で、実は小樽とか滋賀ぐらいの規模であれば、法人文書の30%か40%は残すことになり、結論からいいますと、アイスランドのレイキャビク市の公文書館に行ったのですが、そこでお話を聞いたのですが、30万人ぐらいの都市なのですけれども、やっぱり、そこも60%ぐらいの文書を残しています。保存期限の満了した文書を受け入れているのですけれども、学校関係の文書とか、そういうのもかなり残してしまっていて、市民から受けてい

た、ラブレターのコレクションも残しているということでしたけれども、だいたい小さい組織というのは、実際のところ残さざるをえないのです。

どういふことかといいますと、小樽の法人文書とかを見ていただくと非常によくわかるのですが、京都大学ですと、総務課が100以上あります。財務課も100以上あります。北大から転勤してきた職員が言っていましたが、契約なら契約の仕事ばかりをやっていて、ある職員がかかわる仕事というのは、契約のある部分だけなので、そればかりの文書をひたすらつくり続けます。ある簿冊というのは、契約全体ではなくて、ある部分についての資料ばかりが綴られるということが起こります。そうすると、実際、それを捨ててしまっても問題ないことがわかれば捨ててしまってもいいのですが、小樽とか滋賀ですと、一人の職員の人がかかわる仕事というのは非常に多岐にわたっていて、契約であれば、たいがい一人の職員が全部やっていたりして、1つの簿冊のなかに非常に重要な文書も入っているし、契約の非常に形式的なものも入っているしということがありまして、それを1冊捨てられてしまうと、もうたいへんなことになってしまう。つまり、ある重要な文書も捨てられてしまうということになるものですから、結局、それは残さざるをえない。きれいにまとめておいてくれればいいのですが、いろいろなところに、あっちゃこっちゃんにメモが散らばっていたりすると、簿冊1冊残さなければいけないということになりまして、実際、残さなくてはいけぬ量というものは、絶対量がたいしたことないということもありまして、小さい組織というのは、傾向としては文書の量をたくさん残さないと、あとになってから、よくわからないということになってしまう傾向があります。

ただそれが、筑波と東京の国立公文書館のところに全部集められてしまって、評価選別を機械的におこなわれてしまうと、おそらく、せっかくサンプルで滋賀大学の資料が残ったとしても、よくわからない。現場からすると、滋賀大学の年史編纂を東京でやろうとしても、何がなんだかよくわからないということがありえます。そのへんのことは、ほんとうに、アーカイブズが立ち上がったからの議論というか、そもそも日本だと、フィンランドとかデンマークとの違いというものも全然自覚されていませんし、今回の「公文書管理法」は、2つの考え方を入れられたのですが、どこからそういう知恵が入ってきたのかというのは、よくわからないのですけれども、そういった違いというものを、よく認識して、先を読みながら対応していく必要が、どうもありそうだなと私は感じ

ています。

たぶん、細かい議論よりも、理想を言えば、各大学・各組織で、日本のように社会の規模が大きなところだと、1億人口がいますし、デンマークのように、たかだか500、600万人ぐらいの人口のところを一元的なアーカイブズでやるのとは意味が違いますので、おそらく各組織でやったほうが、うまくいくのではないかなと。うまくいくというか、それをやらないと年史編纂ができなくなるのではないかと私は考えています。

それから次に、もう1つお配りした目録について、簡単にご説明しようと思います。さっき、データの整理というところでお話させていただいたのですが、そうやって電子目録というものをつくっていくと、たかだか半日ぐらいで紙目録というものをつくるのが可能になりました。ほんとうは紙でつくって、それを電子目録化して、それをまた修正していくとか、そういうことが大事なのですが、ちょっと余力がないものですから、やり方としては電子目録が先になってしまっています。電子目録をつくって、必要があれば、こういう紙でつくると。この紙もつくり続けようかと思っていますので、次の紀要でもっと詳しいものを載せようかなと、いま考えていて、とりあえず今回は、秘文書綴、例の小林象三のことも載ってまして、けっこう日本史の人から見ると、社会科学研究会に関するもの、びびっときそうなものがけっこう入っていますけれども、こういった目録も、きちっとデータをつくっていけば、ほんとうに、ぱっぱと紙目録をつくることができます。

ちょっと凡例について簡単に申しあげますと、ISAD(G)2に依拠しつつ完成させることを目指している。記述項目が非常に多いので、完全には準拠することはできないのですが、まだ途中の段階だということです。今回のものは、一応、サンプルということです。各資料の現在の状況というのは、検索してもらえれば、今日も作業を二人でやっていますので、またデータはどんどん増えていきますし、検索することも可能です。

資料の整理のデータ化は、本来、100年かけて実施されるはずのものを、無理に短い期間に、限られた予算のところで行っていると、そういった限界というものがああります。フィンランドのヘルシンキ大学のアーカイブズに行ったとき、あそこは1930年ごろに、いつできたかわからないらしいのですが、アーカイブズができて、70年ぐらいの歴史があるのです。ですから、いま専任は3人ぐらいの体制で、東大よりも大きいですが、問題ありません。やっぱり、そういった長い年

月をかけて目録をつくって、あるところでデータ化も一緒にやっていくというのが本来の姿なのですが、かなり無理したかたちで小樽商科大学ではつくっているということです。

今回、秘文書綴だけを載せてみたのですけれども、小樽商科大学がいわゆるファンド、総務課というのがサブファンドになります。図書館学とまったく違うのですが、政策ですとか、組織で分けていくという考え方をしていますので、まず小樽商科大学という大きな分類があるわけです。そのなかに総務課という分類があって、ただこれは注意しなければならないのは、総務課にしていいかどうかというのはわからないのですが、総務にしていることもあるのですけれども、特に自治体なんかですと、しょっちゅう名称を変えていまして、役割で分けたほうがいい、本来の考え方からすればそうですが、総務系の部署とか、そういう関係を、ほんとうは分けたほうがいいのかもかもしれません。そのなかで、秘文書綴というのが、一応、人事関係とか、重要項目というものが綴られていて、1つの固まりになっていると考えていますので、秘文書綴を簿冊のとおり、一応、固まりにして、シリーズとしています。

秘文書綴の、例えば1925年というのがサブシリーズになります。例えば『講師嘱託之義報告』という、これが、いわゆるファイルになります。このなかに文部省とやりとりをした紙ですとかが数枚入っています。ここがアイテムになりますので、一応、いまファイルまでしか載せていないということになります。特に戦後の文章というのは簿冊になっていないことが多いですし、簿冊が入り乱れているということもあります。そういったときに、これが検索システムのいいところなのですけれども、復元していくということができません。現在の秩序というものは壊さない。いまの状況はそのままにしておけばすむのですけれども、データ上で、もとの秩序に戻してやってやるのです。そうすることによって、初めて、ある政策の一連の流れということが資料のなかでわかるということが出てきます。

たまたま、この秘文書綴が固まりになっていますので、これはそのまま載せています。戦後に關して言うと、ある政策が本来1つの簿冊で年度末に綴られていたという、昭和40年ごろまでされていた仕組みがあればよかったですけれども、それ以降、小樽商科大学の中でかなり乱れていまして、いろいろなファイルのところに散在してしまっていたりとか、あとから出てきたりとか、あとから個人の持っていたものをもらったりとかしていますので、それをもらいながらデータ上で修

正をかけて、復元していく。できたところで、例えば目録にしてみるとか、それを秘文書綴りみたいな感じで、きれいに資料の構造が見えてくるということになります。そういったことも作業のなかで意識しながらやるということも、少しずつ始めています。

秘文書綴は、実は画像化して見られるのですけれども、ちょっと公開していいかなという部分がありまして、つまり健康診断の部分は載せないつもりでいます。全部、Photoshopで消しています。いま各自治体で情報公開をどうしているかという、請求があると初めてコピーをしているのです。そこにマジックで塗って、それをさらにコピーをかけて渡すというようなことをしているのですが、画像化してしまうと、それが画面上でできますので、そういう状態にして初めて載せています。

あと、お時間があれば、例をちょっとお見せしますが、秘文書綴に関しては、かなりのコマ数、5,000コマ以上ありますもので、公開はだいぶ先になりそうです。そういう作業も全部終わらないと、なかなか、個別に請求がたくさんあったものに関しては優先してやっしまおうかなということも考えながら、いま作業を進めているところです。

ホームページをちょっと見ていただいて、一番メインの検索システムは、この「所蔵資料検索」になります。もう見られたかもしれませんが、卒業アルバム。これは検索システムではないのですけれども、1930年まで載せています。これを、こうして、このあとに展開するプログラムは、実はPhotoshopにあるものを改造してくれた人がアメリカにいまして、そのプログラムがネットに転がっていたものを使っています。この『緑丘新聞』PDFは、拡大すると小さい字はJPEGだとつぶれてしまうとか、そういう問題がありまして、JPEGはJPEGでも検索のほうに載せてはいるのですが、PDFでもつくっています。これはPDFですので、拡大して見ていただければと思いますね。PDFだと、たぶん5メガバイトぐらいになっていて、さっきの卒業アルバムが、だいたい1メガバイトぐらいになっていますので、それで充分だと思います。

肝心なことをいい忘れていましたけれども、TIFF形式にマイクロフィルムからスキャンするときに、実は失敗しまして、仕様書に400dpiと書いてしまったのです。それをやるとだめで、マイクロフィルムから最低600でやったものを、Photoshopで加工するときにリデュースして軽くするというをしないと、文字がかなりつぶれます。ですから、600でやると、わりと文字がましになるのですが、400だとちょっと厳しい、600でやると、加工するのに、時間がかかります。それ

を考えて400にしたのですけれども。

【会場】Photoshopで加工するのは誰ですか、業者ですか。

【平井】いや、私がやっています。

【会場】1コマずつPhotoshopで加工を？

【平井】16万コマ。

【会場】夜なべという感じですね。土日も、夜も、という感じで。

【平井】1回、身体を壊したもので、それで残業しなくなったので、いまは時間でやれる範囲でやっています。それで何とかなってしまっていますけれども、とにかくパソコンを使うのも、仕事を減らすという考え方なのです。もとのデータをInDesignにしたりとか、例えばニューズレターなんかは、ほかの大学に比べて、ものすごくスピーディーにつくっています。そういう時間をずっと圧縮していってしまうので、Photoshopも実は、それを2、3台並べたパソコンにやらせながら、それでぱっとここから先のことをやったりとか、あと画面上で別の作業もやったりしています。InDesignを組み合わせながらPhotoshopもやるとか、そういうことも順次やりながら。

【阿部】時間が短くなっても、密度が濃いから、よけいたいへんな話ですね。

【平井】ただ、何度か申しあげていますように、やれるところまでやって、それをしかも一部の趣味でやるのではなくて、すべて法人文書に関しては、さっきも触れましたけれども、1960年まで全部画像化をやってしまう。今年、載せれば、一応、最低限のことは全部やれてしまいますので、それを検索を細かくしていくということは、時間の限りやっていくということで、仕事の優先順位というのを、いろいろなところで、ここを圧縮するとか、このところをいつまでにやるか、広く薄く、一応やっておいて、あとはやれるところを見ていくという、そんな感じで、綱渡りしながらという、そんな感じなんですけれども。これは何も私一人で考えたというものではなくて、考えさせられたというか、結局、学内で反対があるので、人数がなかなか増えなかったものですから、一人でどうやったら2011年までにやれるかというところを考えた末に、それだけの簡単な結論ですので、ほんとうに難しいことをやろうとしているわけではないんです。ですから、例えば人の声や、人が近づいてきたなと思ったら、Photoshopで長くかかる作業を始めます。そうしたら、それをパソコンにやらせておきながら、ゆっくり話をしているというような感じです。これから会議だぞとか、お昼だぞというときも、

Photoshop に作業をやらせておいて。理想をいうと、山畑くんといっていたのは、仕事の帰り際にパソコンソフトをセットしておいて、朝までに作業をやるかと、そんなこともいっていたのです。パソコンも、けっこういろいろなプログラムを入れると、どんどんしてくれるので、ただそれは、さすがにちょっとチェックをしたりとかできないので、そこまではしていないのですけれども、将来的にはそこまで考えて、パソコンはほんとうに休まずやってくれるので、これを頼りにやっていこうかなと思っています。

いまは二人増えたので、すぐ戦力というわけにはいかないですけれども、手伝ってもらっているので助かっています。

『緑丘新聞』記事検索は、さっきお見せしたとおりで。これについては、ここに、「緑丘新聞記事のデータ入力について」と載せていまして、OB にやってもらおうかなと思って、メールで。何でメールかという、入力が多いので、データを入れたりしていても、いろいろなもので入れられてしまうと、うまくいかなかったりするので、テキストのメールぐらいが一番いいのかなと思ひました。こういうふうにして入れてくれたら、お名前つきでデータを載せますということで、去年は新聞会のOBの人たちとやったので、やってくださいというふうに呼びかけたのです。

検索システムをつくったのは、そういうこともありまして、人がほんとうに、いま小樽商科大学百年史編纂室に1万人ぐらい手伝ってくれる人が、ある日、突然現れても、すぐ仕事が振れます。データ入力をやってもらえればいいわけです。そうしたら、それを全部載せるだけです。いまは画像でも、文字データでも、何でもかんでも同じ仕組みで、画像を統一できるので、どんなデータが来てもオーケーなのです。これを業者に任せてしまうと、たぶん、そういうことはできないと思ひますし、自分でつくっていますから、問題だと思ふところも自由に、直接消したりすることもできますし、そういうことも。たぶん業者の管理だと、ちょっとそのへんがうまくいかないのかなという気がしています。

あと、これが所蔵資料検索。これがまだわかりにくいと言われてはいるのですが、一応、ここに旧植民地も含めて、そういうものも全部入っています。例えば、これをクリックしてやると、政策名、簿冊名、こういうふうに、総務関係のものが出てくるのです。

【阿部】これが簿冊単位。

【平井】これが簿冊です。1945年だから、敗戦のときの年ですね。これはたぶん、文部省から来た文書です。解説をほんとうは載せないといけないのですが、余力がないので、とりあえず画像を載せてしまっているということなのです。実際に見てもらって、自分で展開してもらえれば、何かということはずぐにわかるということです。面白い資料もあります。例えば紀元節をどうしたか。敗戦が1945年の8月ですから、次の2月から問題になるのですが、自宅待機など、その他そういうのが、ちゃんと通知が来ています。引揚者の取り扱いだとか、そういったようなことも、こういった資料から出てきます。

【阿部】これは、この画面からコピーすることも可能なのですか。それぞれの利用者が。

【平井】はい。いつも荻野先生はWindows IEを使っていますが、コピーされています。私はWindows IEを使っていないので、ちょっとよくわからないのですけれども、それぞれの閲覧ソフトによって、ちょっと違うようですので、ひとことで申しあげることにはできません。

【阿部】それをコピー、ダウンロードできるようにしないという議論はあったんですか。

【平井】いえ、とくにありません。結局、ネット上に載せてしまうということは、セキュリティーが100%ということは絶対あり得ないのです。可能な限り、むしろ積極的に公開することを考えています。

【阿部】私も同じ考えです。

【平井】次に「小林」を入れてみましょう。

【菊地】小林だと、すごいことになるでしょう。

【平井】小林象三ということでいくつか出てきますね、こういうふうに。このメインの検索システムのプログラムは非常にややこしくて、これは山畑くんに設計してもらったので、私はいじれなくて困っているんですけども、一応、こういうものを、さっきの『緑丘新聞』の簡単なものであれば私もつくれるのですけれども、これをやるときは、非常にややこしくて、組み合わせてデータが出てきますので、階層構造がどんどん出てくるようにしようとするなど、いろいろプログラムして、たぶんつくった本人も、何がどうなっているのか、あとからわからないと思います。こういうかたちにしたのですが、これが評判が悪くて、わかりにくいということをいわれています。しかし、小林象三の陸叙について、一件だけの書類があっても何の意味もなく、小林象三なら小林象三のデータというものがすべて関連してつながって、初めて1つの資料の固まりになって、しかも、その資料が上下の階層

も含めて、小樽商科大学の資料の全体のなかで、どういう位置づけになっているかということが画面上でわかるようにしていくというふうに考えているのですが、なかなかそこまで充分につくりきれていないです。

あと、「千島」「樺太」ですね。これはもうちょっとで、たぶん、「千島」「樺太」に関しては、ぜひカバーしないといけないので、全部やってしまっていますね。もうどれをするとか、考えていないですね。もうとにかくすべてやってしまいました。これに関しては、やらなくてもよさそうなものも、けっこうあるのですけれども。

次の学生寮関係の文書なのですけれども、実は訴訟になっていまして、女子学生3人が被告人になっています。たしかに当時の新聞で容易に調べることができますし、附属図書館に行けば『北海道新聞』の縮刷版で、全部名前を見ることができるのですけれども、あえてそれを百年史編纂室で公開するかということ考えたときに、する必要性というのは全然なくて、一学生で充分ですね。資料的には問題になりません。

ですから、これは「時の経過」と、よくアーカイブズでいわれることなのですけれども、時の経過というのは、何も公開を広げていくだけではないのです。せばめていく資料もあっていいと。これはどういうことかということ、例えば昔の犯罪というものを、いまさら根掘り葉掘り、当時新聞で、でかかど報道されたことであっても、もう関係者もみんな死んでしまったりしたようなものについて、あえて名前を載せる必要はないわけですね。そういったものを消していったらいいのではないかというのもアーカイブズの議論にあります。これについて、公開されている名前なんだから、載せてもいいというふうに言えるのですけれども、もう結婚して、子どももたぶん20歳ぐらいになっているかなという、そのぐらいの女性たちの名前を載せる必要はないので、消してしまっています。こういう削除をしたうえで、初めて載せようと考えていますので、非常に手間がかかっています。

これをさすがに業者にやらせるわけにはいかないですし、こういう作業をしながらPhotoshopで作業をして、順番に載せていくというふうに。ほんとうに16万コマなので、気が遠くなるのですが。

【会場】すごいですね。うちではできません。

【平井】実はもう終わってしまったから、いまいえるのですが、16万コマの対象になった資料というのは、整理されていなかったものもあって、見切り発車的に出したものが、あります。ISAD(G)2

にしたがってと書いてあるのですが、これはネットでやる場合に、EAD というもう1つ別のアーカイブズの検索システムの考え方があるのですが、それに合わせなくてはいけないのですが、一応、入れているデータは、最低限、そのなかで取捨選択しています。

あとはもうほんとうに、まとまりのない報告になってしまったのですけれども、だいたい、こんな感じですね。最後にひとこと、まとめます。多くの大学がアーカイブズという盲導犬を伴侶とし、それぞれのすばらしい遺産を未来に残していくことを願います。どうもありがとうございました。

(平井)